

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1 作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、 類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	西山純子（千葉市美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	森 登（学藝書院）
樋口良一（版画堂）	
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (15)

【と】

土井イサミ (どい・いさみ) 1903? ~ 1965?

1903 (明治36) 年頃、日系二世としてハワイに生まれる。1920年代以降ニューヨークで活動した日本人美術家グループ (紐育日本人画会・画彫会ほか) の中の一人と思われる。1930年ニューヨーク近代美術館で開催の展覧会〔詳細不明〕や1934・1935年の「邦人美術展覧会」(紐育新報社後援 A.C.A. ギャラリー) に出品歴を残す。版画の制作は、リトグラフ《裸婦》(1930)、木版画《階段の手すり》(1930頃) が知られる。1965 (昭和40) 年頃逝去か。【文献】『太平洋を越えた日本の画家たち展』図録 (和歌山県立美術館ほか 1987) / 『アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896 - 1945』展図録 (東京都庭園美術館 1995) (樋口)

土井義信 (どい・よしのぶ) 1903 ~ 1977

明治36 (1903) 年11月1日に生まれる。ドイツ文学者。『ファン・ゴッホの手紙』(養徳社 1947) などの翻訳家。戦後は東京商科大学 (一橋大学に包括) 講師、東京工業大学教授を務める。1977 (昭和52) 年1月18日に逝去。版画制作では、東京吉祥寺の「朴の会」が発行した版画集『むさしの風景』の創刊号にあたる其の1 (1938.11) に《上水の路》を発表。「朴の会」は吉祥寺周辺に住まいを置く文化人の年賀状交換が始まりとされ、版画集『むさしの風景』を発行するまでに交友を深めた。出品者には版画家の織田一磨をはじめ、日本画家の塩出英雄、児童文学作家の柴野民三など、美術や文学などの文化人が多く含まれている。【文献】『むさしの風景』/ 国立国会図書館典拠データ (加治)

土井良井 (どい・りょうい)

1937 (昭和12) 年7月21・22日開催の長崎市版画講習会 (講師: 西田武雄・恩地孝四郎ほか 勝山小学校) に参加。当時、長崎市立新興善小学校に勤務。【文献】『エッチング』58 (樋口)

東園 (とうえん)

詳細は不明。戦前作と思われる雲母摺の木版画《犬》(渡辺版) の制作が知られる。【文献】『山田書店新収目録』22 (1995.7) (樋口)

東江 (とうこう) ➡ 石渡庄一郎 (いしわたり・しょういちろう)

東郷青児 (とうごう・せいじ) 1897 ~ 1978

1897 (明治30) 年4月28日旧薩摩藩士族の家に生まれる。本名、鉄春。上京し、青山学院中学部に入学。絵画を学び始めると共に、竹久夢二展を見て夢二宅に出入りする。卒業後の1914年、ベルリンから帰国した山田耕筰を知り、翌年耕筰の事務所で作した作品を日比谷美術館で開催の個展で発表する。これを機に有島生馬に師事。1916年第3回二科展に《パラソルさせる女》が二科賞を受賞し、以後二科会を中心に活躍すると共に、亡くなるまで二科会の主要画家として活躍し運営を担った。1921年フランスに留学しダダイズムに接し、翌年にはイタリアで未来

派を知り、リオン美術学校に学んだ後、パリに戻り1928年に帰国する。作風は表現主義から未来派、キュビズム、シュール・レアリスム等の影響を受け、独特のモダンで幻想的な女性像は青児調として包装紙や装幀など商業デザインとして持て囃された。また宇野千代などとの恋愛問題も世間の注目を浴び、『いろざんげ』(河出書房 1956) 等の自著もある。版画作品としては1919年に東郷自身が「東郷青児木版画頒布会」を催し、『泰西音楽家肖像木版画』(《ヘートーベーン》《シヨパン》《ワグナー》《セバステイアン バツハ》《モッアルト》等) を自画自刻手摺により頒布し(『中央美術』4-2、『みづゑ』168)、翌年には同版画集中の《ヘートーベーン》が柳屋画廊『美術と文芸』18号(1921.8)の「新版画集」欄(一枚、3円50銭)に見られる。1934年に多色木版《四季少女》(4枚組)、《チューリップと少女》を加藤版画研究所が発行している。また相前後して京都の美術書院八寶堂から『新妝会・新感覚図案』第一集として多色木版《つばき》《月夜》《花》《春》等があり、藤田嗣治なども同シリーズの木版図案を描いている。1966年頃に自画自刻の多色銅版数点を試作するも未完に終わった。1978 (昭和33) 年4月24日、二科展巡回展の熊本で客死。歿後、遺族サインを付した写真転写によるリトグラフ・シルクスクリーンの美人画が多数作られている。【文献】『日本美術年鑑』昭和54年版(東京国立文化財研究所 1981) / 瀬木慎一「没後新発見! 東郷青児の銅版画」『版画藝術』23(阿部出版 1978.10) (森)

百海桃見 (どうみ・ももみ)

兵庫県の「西日本新版画創作普及協会」による機関誌『西日本新版画』第2年1輯(1937.3)に《十日戒》《雪夜》、第2年2輯(1937.7)に《子供と下駄》《橋畔》、第2年3輯(1937.12)に《大阪城》を発表。会員の寸評には「もう一つ画としての実感が溢れたらうと思ひます。」とか「版画らしい版画、床しさのある版画と存じます。」などと記されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

百海百々代 (どうみ・ももよ)

兵庫県の「西日本新版画創作普及協会」による機関誌『西日本新版画』第2年1輯(1937.3)に《紅葉狩(隈)》、第2年3輯(1937.12)に《景清(隈)》、第3年1輯(1938.4)に《狐忠信(隈)》《牛若丸》を発表。《紅葉狩(隈)》の会員寸評には「気になるのは赤の色が少し暗い」との意見もある。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

堂本印象 (どうもと・いんしょう) 1891 ~ 1975

1891 (明治21) 年12月25日京都の醸造業の家に生まれる。本名、三之助。1921年京都市立絵画専門学校を卒業。在学中に西山翠嶂塾に学び、1919年《深草》で第1回帝展に入選、1921年には《調鞠図》で第3回帝展特選。1934年画塾東丘社を創立、主宰。翌年京都市立絵画専門学校教授 (~1941) となり、京都画壇の一翼を担った。1950年文化勲章受章。1966年には自ら設計した堂本美術館 (現在の府立堂本印象美術館) を開設し、自作を展示陳列する。初期の古典的表現から60年代には抽象表現へと変貌し、絵画制作以外にも彫刻、染色、陶芸、金工等に多才振りを発揮し、精力的な創作活動を行っている。『看心有道』(河原書店 1940) 等の自著もある。版画は原画のみを描いた伝統的な工房制作の多色木版で、1928年『京洛八景』(8点 京都市編輯 大礼奉祝会)、1935年《初化粧》(版元: 馬場信彦、彫師: かつむら、摺師: さとう)、

1941年から43年にかけて《聖観世音菩薩》(第一期ノ一)を始めとして300度とか450度摺りと版を重ねた『印象仏画集』(11点、西宮書院)を刊行し、1941・42年の「国粹版画展」(銀座・資生堂)にも出品している。1975(昭和50)年9月5日京都で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和51年版(東京国立文化財研究所 1978) / 『日本の版画V 1941 - 1950』展図録(千葉市美術館 2008)(森)

遠山教圓(とうやま・きょうえん)

東京に生まれる。1910年の第13回白馬会展に油彩画《午後の日かげ》《むしあつき日》と水彩画《御堂》《夏の日》が入選。翌1911年東京美術学校西洋画科志望に入学。在学中は新たに結成された「光風会」に出品し、第1回展(1912)に油彩画《噴水の午後と少女》とエッチング《遊廓の裏と待合の露路》、第2回展(1913)にエッチング《無題》、第3回展(1914)にエッチング《諸法因縁生 諸法因縁滅》、第4回展(1916)に水彩《初冬の村》が入選した。これらのエッチングは我流で試みたようで、同級生であった鈴木保徳は「上野の美校で、僕等が貧しいエッチングの試作を始めたもう一つ先の準備時代とでも名づく可き頃の御話をませう。 / [中略] / 其れは我々の中でも、前記の作家[ホイッスラーやフォーゲラーなど]のエッチングの妙感に一沙陶酔して居たクラスメートの遠山教圓君が、日夜エッチング描法に憧れ苦しむだ結果、実に怖る可き作画をして学校へ持参したと言ふ事実なのです。 / それは誰が見ても正しく立派なエッチングなのです。其して当時の浅草裏町や隅田川夜景や鐘紡の工場裏風景などが、遠山君の如何にも得意と自信とで燃へ上らむ計りの昂奮の中に、一枚づゝ皆の手に渡されるのでした。 / 彼に対するその時の羨望と疾怒と賞讃とに泣かむ計りになつたのは恐らく僕計りではなかつたのです。各級の人々がなだれをなしてそれを見るために押し寄せて来ました。 / 處で勿論それは真正のエッチングではなかつたのでした。彼の告白に依ると、白の吸取紙のやうな悪い画用紙に、白蠟を全面的に擦つて、その上に針でモチーフを描くのです。そのあとから何故か絵具を用ひずに靴墨を脱脂綿につけてこすり、其のあとで新しい綿で大体を拭ふと、針の筋丈けに見事に靴墨は滲込みでしまふのです。然る後に明所を又一段ふき取るといつた形なのです。其處で最後の仕上げとして、時には火鉢に遠くかざし乍ら蠟の面を落付かせてしまふと言ふ仕掛なのです。 / 言つてしまへば之れ丈けなのですが、こんな事でも当時我々の手の届く處には、一つの銅板も一台の印刷機もなかつたので実に大した発見で、当時美校洋画部のエッチングに熱烈な憧憬を持つて居た学生及びそれ以外の人々迄も風靡してしまひました。 / 構造社の濱田三郎君や二部会の中村研一君などで、真物の試みを開始したのは此の後の時期に属するわけです」(『憧れのエッチング』『エッチング』45)と証言している。また、同級生の草光信成によれば、1916年春頃に製版科主任教授結城林蔵と助教伊東亮次による西洋画科在学生ののためのエッチング講義が1学期間あり、遠山の他、清水良雄・鈴木保徳・中村研一・宮地茂・吉澤廉三郎らも聴講実習していたという(『回顧』『エッチング』42)。1916年東京美術学校を卒業。その後の活動については不明な点も多いが、1918年頃は東京市浅草区南松山町に住み、1926年に同級生の曾宮一念・鈴木保徳・寺内萬治郎らと「柘榴社」を結成。翌年に第1回展(4.2~7 日本橋・丸善)を開催し、油彩画を出品。1928年の第9回帝展にも油彩画《初夏清明》

が入選している。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい 1992) / 『明治期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 1994) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 大槻憲二「柘榴社の処女展覧会を観る」『アトリエ』4-5 / 『エッチング』42・45(三木)

富樫広吉(とがし・こうきち)

1930年に夭折した洋画家小野幸吉の郷里山形県酒田市では、1932年、同級生など友人達が『小野幸吉画集』(金星堂 1932)を出版する。その翌年には小野の版画《自画像》を挿入した版画誌『隕石ト花々』を創刊。富樫はその第1号(1933.1)に《教会》を発表する。【文献】「小野幸吉」『近代日本版画家名覧 1900-1945』(『版画堂目録』104 2014.6) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

富樫徳太郎(とがし・とくたろう)

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及の目的で全国の小・中学校を回り、教師や生徒を対象に版画講習会を行った。1935年夏の北海道講習会の帰路に、西田は研究所製プレス機を1933年頃に購入した山形県師範学校図画教師の小塚義一郎を訪ね、その場で実技講習会を行なった。当時5年生に在学していた富樫を含め生徒5名が参加。富樫がその時制作した風景を描いた銅版画が研究所機関誌『エッチング』第35号(1935.9)に掲載されている。なお、同号には小塚による講習会の感想「エッチング感」も紹介されている。【文献】『エッチング』33・35(加治)

富樫寅平(とがし・とらへい) 1906 ~ 1951

1906(明治39)年2月27日新潟県北蒲原郡新発田町(現・新発田市)に生まれる。1922年新発田商業学校卒業。家業(財甚旅館)の傍ら芸術写真を試み、また兄甚平の影響などから油絵を始める。1926年佐藤哲三・長谷川武雄・大滝直平らと絵画グループ「野人社」を結成し、野人社展を開催。1928年上京して二科技塾に入り、本格的に絵画を学ぶ。1929年の第4回1930年協会展、1930年の第5回同展出品を経て、独立美術協会に参加。独立美術協会展には第1回展(1931)より毎回出品を続け、1937年《水浴》で独立美術協会賞を受賞。1943年同协会会员となり、以降は独立美術協会の中堅画家として活動した。また北原白秋と親交、白秋の詩集や巖谷小波の童話などに挿絵を描く。1951(昭和26)年8月26日逝去。版画の制作は、中学卒業後の新発田時代、1927年秋に佐藤哲三の兄・佐藤重義(号、十蟻)が中心となり、新発田の文芸誌『郷土』の仲間らに呼びかけて誕生した同人文芸誌『土塊』(「つちくれ」あるいは「どかい」と呼称)に参加。創刊号(1027.12)に《光を仰ぐ》、第2号(1928.1)に《静物》《年賀状》、第3号(1928.3)に《果実の図》、第4号に《習作》、第6号(1928.11)に《風景習作》、第7号(1929.1)に《琉球の壺》の木版画を制作する。また第4号(1928.5)からは佐藤重義のあとを引き継いで編集を担当し、月号評論や短歌なども発表している。【文献】『佐藤哲三展』図録(東京ステーションギャラリー・神奈川県立近代美術館 2004・2005) / 『佐藤哲三の時代』展図録(新潟県立万代美術館 2008) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

富樫彦一(とがし・ひこかず・ひこいち)

1927年秋に佐藤哲三の兄・佐藤重義(号、十蟻)が中

心となり、新発田の文芸誌『郷土』の仲間らに呼びかけて誕生した同人文芸誌『土塊』（「つちくれ」あるいは「どかい」と呼称）に参加。創刊号（1027.12）に《小品》、第2号（1928.1）に《習作》《賀状》、第3号（1928.3）に《シクラメン》、第4号（1928.5）に《早春》、第7号（1929.1）に《年賀状》の木版画を制作する。【文献】『佐藤哲三展』図録（東京ステーションギャラリー・神奈川県立近代美術館 2004・2005）／『佐藤哲三の時代』展図録（新潟県立万代美術館 2008）／『創作版画誌の系譜』（樋口）

渡頭繁美（とがしら・しげみ）

朝井清が主宰する「呉版画倶楽部」（1936.5頃結成）の会員。参加時期は不明であるが、1939（昭和14）年6月に開かれた第2回呉版画倶楽部展に出品している。【文献】『日本版画協会会報』31（1939.9）（三木）

外川春子（とがわ・はるこ）1906～1982

1906（明治39）年の生まれ。父は海軍軍人。1930年に一家で静岡市東鷹匠町の栗山茂の住む家の向いに引越したのを切っ掛け、隣家の内田達次らと栗山のもとで版画を始め、同年10月の第2回童土社絵画展（11～13 静岡・田中襦衣店）に木版画《梅の木》《くちなし》[目録に「津川春子」とあるも「外川」の誤記]を出品。また、栗山が実務を担当した『ゆうかり』（発行名義人：小川龍彦）の編集を内田とともに手伝い、同誌の第1号（1931.1.1）に《くちなし》（第2回童土社絵画展出品作）《風景》（新作）、第2号（3.10）に《やさい》《しくらめん》と歌「ふゆの日」、第3号（5.10）に《水仙》と歌「浅春抄」、第4号（8.5）に《花》と歌「展覧会」を発表。また、1931年6月の第3回創作版画展（27～29 静岡・田中屋画廊 主催：童土社）に《椿》《花》《ひなぎく》《やさい》《水仙》《紫苑》《花》《二人の子供》、10月の「かけたつば美術展」（17～18 静岡・西奈尋常高等小学校 主催：龍南芸術研究会）に《花》《水仙》を出品している。その後、結婚のため版画制作から離れた。1982（昭和57）年逝去。【文献】『第二回童土社絵画展覧会』目録（1930）／『第三回創作版画展覧会』目録（1931 童土社）／「かけたつば美術展」目録（龍南芸術研究会 1931）／栗山茂「静岡に於ける創作版画活動」[静岡の創作版画]（静岡県立美術館 1991）／『創作版画誌の系譜』（三木）

土岐 鶴（とき・つる）

東京の城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による木版画講習会（講師：平塚運一 1937.11.25～29）に参加し、版画集『日本橋版画』講習会記念号（1937.12）に《橋》を発表する。教師対象の講習会だったことから、当時は日本橋教区の教職についていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

徳岡神泉（とくおか・しんせん）1896～1972

1896（明治29）年2月14日京都市上京区神泉苑町に生まれる。本名、時次郎。1909年土田麦僊の紹介により13歳で竹内栖鳳の「竹杖会」に入塾。将来を嘱望されながら、1917年京都市立絵画専門学校卒業後も文展落選が続き、一時期京都を離れ富士山麓に移り住む。1919年《狂女》を制作。この頃より「神泉」と号す。1923年関東大震災を期に京都に戻り、再び竹杖会に入塾。1925年第6回帝展に《罌粟》で初入選。第7回（1926）・第10回帝展（1929）で特選となり、以降帝展・新文展・日展などに出品する。

1951年《鯉》で日本芸術院賞受賞。1957年芸術院会員となる。1966年文化勲章受章。簡潔で幽玄な色彩の画風は神泉様式と呼ばれた。1972（昭和47）年6月9日京都市で逝去。版画の制作は、京都の新進日本画家22名を集めて刊行された木版画集『新進花鳥画集』（マリア画廊 1931～1933 全36図）に《すすき》《蔓りんどう》《白椿》の木版画3点を制作する。【文献】『新進名家花鳥選』上・下巻（㈱マリア書房 1987）／『山田書店新収美術目録』81（2008春）／『日本美術年鑑』昭和48年版（東京国立文化財研究所 1975）（樋口）

徳重明子（とくしげ・あきこ）

兵庫県の「西日本新版画創作普及協会」による機関誌『西日本新版画』第1年2輯（1936.10）に《朝顔》、第2年1輯（1937.3）に《壺》、第2年2輯（1937.7）に《さんぼう（静物其1）》と小文「下関より」、第2年3輯（1937.12）に《化粧（習作）》、第3年1輯（1938.4）に《さんぼう》《よめな》、第3年2輯（1938.7）に《表紙図案》《長閑》を発表。《壺》についての会員寸評には「洋画家でぬれられるのでせう、流石にがっちりとした描方はお手のもの（中略）動せない筆法と腕の冴えは画面にあふれてゐます。」と記されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

徳重教助（とくしげ・きょうすけ）

東京府下野方の沼袋にあった日本印刷学校の版画研究会は「常に印刷に関はってゐる関係上、石版、銅版など復興的な仕事をやっておりますが、創作の上にもいゝ作品、作者が現れること、信じます。」という考えにより『日本印刷学校 創作版画作品集』を発行する。その第2輯（1932.3）に《暗室作業》を発表。『版画 CLUB』（4-3 1932.3）の「新刊紹介」において評者の藤森静雄は版画集を「大変いいものである」と褒め、得重の《暗室作業》については「純粋さをとる」と記している。現在創刊号は未見。なお、「日本印刷学校」は社会教育者・社会運動家である希望社の後藤静香が勤労教育実践のために印刷技術者の養成学校として設立したもの。【参考文献】『日本印刷学校 創作版画作品集』2／「勤労女学校や印刷学校も設立した希望社の後藤静香」（インターネット検索「神保町系オタオタ日記 2016-09-23」）（加治）

徳重みち子（とくしげ・みちこ）

兵庫県の「西日本新版画創作普及協会」による機関誌『西日本新版画』第1年2輯（1936.10）に《舞妓》、第2年1輯（1937.3）に《舞妓二人》と短歌、第2年2輯（1937.7）に《工場地帯（其1）》、第3年1輯（1938.4）に《郊外》、第3年2輯（1938.7）に《版画富士》を発表。《舞妓二人》の会員寸評には「御在学中の方のやうにうかがひました。素人にもあんなのが出来るかと感心致しました。美しい版画、嫌味のない絵としてその純朴さに魅せられました。」と記されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

徳竹子之作（とくたけ・ねのさく）

長野県須坂では、日本各地の版画同人誌に作品を発表していた小林朝治が中心となって1933年に開催した「版画及び図画講習会」（須坂小学校 講師：平塚運一）を契機に、版画誌『櫟』（1933～1937）が創刊された。その第9輯（1936.4）に木版画の《賀状》を発表。当時、長野県中野町（現・中野市）で開業する徳竹医院の院長。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」 「臥竜

山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

徳力富吉郎 (とくりき・とみきちろう) 1902～2000

1902(明治35)年3月22日西本願寺の絵所を代々務める徳力家の十二代として京都市下京区に生まれる。幼い頃より山元春挙に日本画を学ぶ。1920年京都市立絵画専門学校に進み、入江波光に師事。在学中の1922年、第4回帝展に《花鳥》が入選。卒業後土田麦僊に就き、その傍ら鹿子木孟郎にデッサンも学ぶ。国画創作協会の姿勢に共鳴し、1927年の第6回展で初入選(《人形とレモン》が梶牛賞)、7回展では国画賞に輝くも、同会の解散に際し、木版画に道を求める。川西英や川上澄生の木版画への憧憬や摺師大岩徳三に伝統的な技法を学んだことが背景にあり、直接的には1928年12月に京都の山本画箋堂で開かれた平塚運一の講習会に参加したことがきっかけとなった。翌年1月麻田辨次・浅野竹二・亀井藤兵衛・中川伊作らと「京都創作版画会」結成、本格的に制作を始める。2月に第1回展を開催(日本の古版画展も併催)、1933年の第3回展までが確認される。また平塚門下による版画誌『版』に講習会に集った京都のメンバーが合流する形で同人として参加(5～8号)。創作版画誌への参加はほかに『風』再刊2号(1929.5)の《壺》、『きつつき』(創作版画倶楽部発行)3号(1931.6)の《洋燈》、『版芸術』9号(1932.12)の《(年賀状)》がある。1929年4月麻田・浅野・亀井・中川と「丹墨社」結成、展覧会を開催。同年の第10回帝展では木版画《月の出》が入選。この年は第9回日本創作版画協会展(《具足之圖》《女優像(龍田静枝)》)や第1回新樹会展にも木版画を出品している。1930年京都大丸美術部より麻田・浅野と《創作版画新京都風景十二ヶ月》を、内田美術書肆より麻田・浅野・亀井と《創作版画花尽》を出版。同年10月の第1回京都工芸美術展に入選(第3回展まで連続入選)、1931年に創立された日本版画協会には第1回展に会友として出品、第2回展より会員として、8・10回展をのぞき12回展まで出品がある。春陽会にも1931年の第9回展より出品(～13回展まで)。1931年8月に大衆版画協会を興して『大衆版画』を創刊、編輯を行うほか作品や文章を発表。他刻他摺も採用し、また「商業版画」を試み、宣伝媒体というかたちで、大衆化へのひとつの回答を与えている(同年11月の2輯で終刊)。1932年11月関西創作版画展覧会に6点出品、1933年8月大阪で創刊された『黄楊』に参加。1935年第1回京都市美術展覧会に版画《黒イ門》が入選。また同じ頃内田美術書肆から色紙版のシリーズ《創作版画 京洛三十題》(1936)《創作版画 京名所》(同)《版画 大阪名所》(同)《近江八景と琵琶湖風景》(1938)や《富士三十六景》(1940)を刊行、芸艸堂から亀井・琴塚英一と組んで出版した自画自刻の《花五十題》1-10集(1935)、大丸美術部から刊行した《京洛十二題》(1939)などもある。展覧会への参加や開催も続き、1937年の東西大家創作版画展(京都・大丸)参加、1938年の徳力富吉郎版画展(芸艸堂)開催、1939年の徳力四兄弟展(京都・大丸)開催、同年の第3回新文展入選(《月明》)、1944年の徳力富吉郎版画展(大阪・阪急)開催などが知られる。戦後もいち早く活動を始め、1945年12月河原町に花洛画房を開いて展覧や工房制作を開始、1948年10月には亀井・琴塚・高橋太三郎と「紅緑会」を結成。1951年に「京都版画協会」を創立して12月に第1回展を開催し、同会より『版画集 京名所』を刊行。1955年亀井・琴塚と『木版花

三十題』を出版、海外での展覧も多く行った。昭和の初めより常に京都の版画界の中心にいて、典雅な京風景を数多く制作しながら、自ら伝統的な彫り摺りを修得するのみならず表現内容や頒布形態に応じて柔軟に他刻他摺も採用し、デパートや新聞社の協力を得て版画を「売る」ことを実践した希有な作家であった。また京都の版画家の多くが戦後日本画に転向するなかで版元「まつ九」を立ち上げ、門下や彫師、摺師を育成したことも特筆される。中国や日本の古版画や大津絵の蒐集家としても知られる。2000(平成12)年7月1日京都市左京区にて逝去。【文献】徳力富吉郎「京都創作版画會に就て」『アトリエ』6-4(1929.4) / 同「新京都情調・版畫・其他」『美之園』6-3(1930.3) / 同『版画隨筆』(三彩社 1967) / 同『日本の版画(日本の美と教養20)』(河原書店 1968) / 岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要』12(京都府立総合資料館 1984.3) / 『特別展 京都の近代版画 - 円山応挙から現代まで』展図録(京都市美術館+朝日新聞社 1986) / 『日本美術年鑑』平成13年版(東京文化財研究所 2003) / 『創作版画誌の系譜』(西山)

戸崎幹治 (とざき・かんじ)

佐伯留守夫、岩田信義、安西七郎ら9人が参加して発行した版画集『我等の版画』(刊行年不明)に《港の夕べ》《風景》の2点を発表する。前記の佐伯ら3人は川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に在学中、生徒たちの版画誌『刀』(1928～1932)の創刊に参加した仲間。この『我等の版画』には佐伯の『刀』第1・4輯(1928・29)に発表した作品も掲載されているところから、3人の中学校卒業(1931)前後に発行されたとも考えられる。【文献】『我等の版画』(刊行年不明)(加治)

戸島武夫 (とじま・たけお)

愛知県半田の教師仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第5号(1931)に作品〔タイトル不詳〕を発表。確認できた『運』第5号では、剥がされてしまったようで、戸島の作品の添付はなかった。現在『運』は5～7・10号(1931～1935)の4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

戸田卓二 (とだ・たくじ)

1929(昭和4)年の第1回京都創作版画会展(2.1～5.10 京都・大丸)に《やどかり》《いちご》、第2回展(会期・会場不明 1932か)に《苺》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録〔京都創作版画会第一回展覧会〕』(京都創作版画会 1929) / 岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『(京都府立総合)資料館紀要』12(1984.3)(三木)

戸田達雄 (とだ・たつお) 1904～1988

1904(明治37)年前橋市曲輪町(現・大手町)に生まれる。翌1905年父の出生地である新潟県中魚沼郡橋村(現・十日町市川西)に移り住んだが、1913年に群馬県吾妻郡磐島村郷原に転居した。1917年旧制前橋中学校を一年で退学し、小林富次郎商店ライオン歯磨本舗に勤める。1923年、2月に竣工した丸の内ビルヂングに開設の丸の内ライオン宣伝部の担当となる。このビル内にライオン歯磨が所有していたスペースで開催の未来派美術協会習作展で、尾形龜之助らを知った。また5月開催の村山知義の意識的構成主義的小品展覧会を見て驚愕、7月にはマヴォ第1

回展を見に行き高見沢路直と知り合った。この年頃から『子供之友』への挿絵を寄せ始める。1924年ライオン歯磨を退社。前後してマヴォのメンバーとなり、この年4月に郷里の前橋市で同郷の住谷磐根との二人展を開催した。以後5月に護国寺前の喫茶・鈴蘭で開催のマヴォ意識的構成主義的連続展に参加、7月刊の『マヴォ』誌に毎号作品図版、リノカット、詩などを掲載した。さらに12月に中原実が主宰する画廊九段で開催のマヴォ展に構成物を出品するなど、マヴォイストとして大活躍した。11月には同画廊で開催の第1回首都美術展にも出品した。1925年4月に第2回無選首都展に出品、6月復刊した『マヴォ』誌にリノカットや散文を掲載した。その頃ライオン歯磨時代の仲間である片柳忠男、新本勝と三人で、神保町に広告会社オリオン社を立ち上げた。1926年1月に尾形亀之助編集の詩誌『月曜』が創刊され、終刊する4号まで毎号随筆や詩を寄せた。その一方で、オリオン社を恵比寿に移し、順調に仕事を拡大させる。1929年オリオン社を銀座に移転させ、仕事も会社の規模も大きくし、1935年には株式会社組織に成長させた。1934年日本野鳥の会に入り、1937年頃から会の機関誌『野鳥』にエッセイを寄せた。また野鳥の挿絵を描き多くの本に掲載する。戦後はオリオン社の仕事のかたわら野鳥の挿絵を制作、また1965年に一線美術会会員となり、銅版画を制作して出品した。戦前の版画の仕事は『マヴォ』2号の《乳房はふくらまうかしら》《ホメオパチ》、4号の表紙に添付された《予言》、5号の《聖きは少女なり》《あでやかなる花柳はるみ嬢》、7号の《め、ずと蛇》のほか、萩原恭次郎詩集『死刑宣告』収録のリノカット版画に確認できる。1972(昭和47)年、マヴォ時代のことを含む回顧録『私の過去帖』を私家版で出版した。1988(昭和63)年2月4日東京の自宅で逝去。【文献】戸田桂太『東京モノクローム 戸田達雄・マヴォの頃』(文生書院 2016) / 『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)(滝沢)

戸田門時雨(とだ・かどしぐれ)

青森の佐藤米次郎が主宰した『サトウ・ヨネジロー蔵書票集 3 秋の集』(青森創作版画研究会夢人社 1935.10)に『日本五大嘶』を発表。この作品は書物展望社主宰斉藤昌三のための蔵書票であり、『サトウ・ヨネジロー蔵書票集』への発表も斉藤から提供されたもの。版画の確認はこの作品のみであり、書物展望社刊の市島春城著『擁爐漫筆』(1936)では表紙絵を担当していることから斉藤との交友関係が窺える。氏名の読み方は『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』には「とだ・もとう」とあるが、ここでは「とだ・かどしぐれ」とした。【文献】『サトウ・ヨネジロー蔵書票集 3 秋の集』(青森創作版画研究会夢人社 1935.10) / 『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』展図録(青森県立郷土館 2001.10)(加治)

登内微笑(とのうち・みしょう) 1891~1964

1891(明治24)年2月2日東京神田に生まれる。本名は正吉。1896年母の死後、父の郷里の長野県伊那に移り住む。17歳の時に上京し寺崎広業に師事するが官展入選を果せず、1918年京都に移り菊池契月に師事する。1925年京都市立絵画専門学校別科を卒業。在学中の1920年第2回帝展に《奈良の作(春日若宮、不退寺、末社の山)》で初入選を果たし、以降は第10回展まで連続して出品する。第6回展(1925)・第8回展(1927)では特選とな

る。その後は帝展審査員や新文展無鑑査など官展を中心に活動する傍ら、1930年から1945年まで京都市立美術工芸学校で後進の指導にあたる。戦後は1954年第10回日展から同展依囑出品する。風景画・花鳥画を得意とした。1964(昭和39)年3月2日京都で逝去。版画は、京都の新進日本画家22名を集めて刊行された木版画集『新進花鳥画集』(マリア画房 1931~1933 全36図)に《黄蜀葵》《桃》の木版画2点を制作。【文献】『山田書店新収目録』81(2008春) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) / 「特選企画 菊池契月と登内微笑、師弟の精華」展(長野県伊那文化会館 2002) EVENT 情報(2017.1.6 インターネット検索)(樋口)

戸張孤雁(とばり・こがん) 1882~1927

1882(明治15)年2月29日東京市日本橋区本小田原町(現・東京都中央区)に生まれる。本名、志村亀吉。母の生家を継いで戸張姓となる。片山潜のもとで英語を学んだことがきっかけとなり1901年渡米、ナショナル・アカデミー、次いでアート・ステューデントリーグなどに通って油彩画と挿絵を学ぶ。また、渡米中の萩原守衛を知り、影響されて彫刻に関心を寄せた。1906年病気のため帰国。木下尚江の『乞食』『良人の自白』、徳富蘆花『自然と人生』などに挿絵を描き、1907年には『孤雁挿絵集』を刊行した。1910年萩原の急死に接し彫刻へと転向、ロダンの影響から出発した生命観のある作品を最初文展に出品したがなじまず、やがて再興日本美術院彫刻部へ転じた。また1913年に石井柏亭らと日本水彩画会を創立した。彫刻や水彩画の制作の一方、大正期には木版画の制作に積極的に取り組み、錦絵に学びつつ近代の感覚を反映させた風景画や美人画、彫刻家らしい量感と動勢のある人物画など、独自の作風の木版画を残した。1915年頃に「孤雁新東錦絵会」と称する版画の頒布会を立ち上げ、第1回目(2月)として《千住大橋の雨》と《お雛様》(自画自刻)を頒布、その後第3回目(4月)に《染模様今様鏡(麻の葉)》、第4回目(6月)に《熱海路「稲村の秋」》、第5回目(7月)に《綱渡り》と《獅子の洞返り》、第6回目(8月)に《化粧》、第8回目(1916年4月)に《裸体の女》を頒布した。第2回と第7回の頒布は不詳。1918年に設立発起人の一人となり日本創作版画協会を創設、1919年の第1回展(東京、以下、第5回展以外同様)に《化粧》《千住大橋の雨》《玉乗》など12点の木版画を出品した。その後1920年の第2回展に《赤松》《雛》を、1921年の第3回展に《山之水車(宮の下)》《御宿》《十二階》を、1922年の第4回展に《水車小屋》《御宿》を、1923年の第5回展(京都)に《千住大橋の雨》《化粧》《玉乗り》を出品した。現在まだ制作年不詳の版画作品も多いが、以上の孤雁新東錦絵会の頒布作品と展覧会出品作品に同じ題名の作品が散見されつつもその年が異なっていることや、1930(昭和5)年発行の『孤雁遺集』に記載された版画作品の制作年とも齟齬があることなどから、定説のように表記される版画の制作年は再検討が必要である。たとえば代表作である浅草の曲芸に取材した《玉乗り》の制作年は、通常1914年とされているが、1924年10月と表記された「孤雁新版画会」発行の印刷物には、「『玉乗』(初版)を完成しましたから、此所にご配布申上る事と致しました。(中略)『玉乗』の版木は速くに出て居り、展覧会などにも陳列され好評を受けたのでありますが、之れ等は試しに印刷した非買の三枚の内であつて、真の版下しは今回が初めてで全くの初版であります」と記載されていることから、

制作年は1924年とすべきかもしれない。1922年には『創作版画と版画の創り方』を刊行して版画の普及に努めた。1927(昭和2)年12月9日逝去。1928年の日本創作版画協会第8回展で、未完を含めて24点が特別陳列された。【文献】藤田東嶼編『孤雁遺集』(初版1930 私家版、複製・礫山美術館)／『戸張孤雁と大正期の彫刻展』図録(愛知県美術館 1994)／深山孝彰「館蔵資料研究 戸張孤雁の版木について」『愛知県美術館研究紀要』2(1995)(滝沢)

土肥耕美(どひ・こうび)

釜山で発行された版画誌『朱美の會版画集』第1冊(清永完治編集 第2冊より『朱美之集』と改題 全5冊 1940.5～1942.8)に「土肥耕美」名で木版画《部落》を発表。また〔改題〕『朱美之集』第2冊(1940.8)に「土肥茗雲」名で木版画《種を播く》を発表する。同第2冊附録「朱美通信」の会員名簿によると、「土肥茗雲」は「土肥耕美」と同一人と思われ、当時の住所は釜山府幸町1-37。【文献】『釜山隨筆』(釜山考古会 1938)／『創作版画誌の系譜』／「土肥耕美園」「今西商店」(インターネット検索)(樋口)

土肥徳太郎(どひ・とくたろう) 1871～没年不明

1871(明治4)年8月長崎県壱岐郡に生まれる。尋常小学校卒業後、釜山に渡り商業見習いとなる(当時釜山で手広く商っていた同郷の今西峰三郎が経営する今西商店で働いていたのではないかと推測)。その後写真業を志し、釜山で写真館を開く。「土肥耕美園」と称し釜山では写真の名手として知られるようになる。写真家として1915年の第1回慶尚南道共進会に『紀念寫真画帖』(出版社不明 1915)を出品している。1907(明治40)年頃の写真館の住所は釜山府幸町1-36。その後の消息は不明。版画の制作は、戦前に釜山で発行された版画誌『朱美之集』(清永完治編集 全5冊 1940.5～1942.8)の第3冊(1940.12)に発表された木版画《鮮舞》がある。なお土肥徳太郎と土肥耕美(別名著雲)は同一人とも考えられるが、ただ同誌第1冊に木版画《部落》、第2冊に木版画《種を播く》を発表の「土肥耕美」(別名「土肥茗雲」)の住所が「釜山府幸町1-37」、また土肥徳太郎の息子と思われる「土肥英一」の住所も「釜山府幸町1丁目37写真館」(『釜山隨筆』昭和13年会員名簿)であることから、「土肥耕美」(別名「茗雲」)と「土肥英一」が同一人の可能性も考えられ、現在のところ「土肥徳太郎」と「土肥耕美(茗雲)」が同一人かどうかは不明である。【文献】『釜山隨筆』(釜山考古会 1938)／『創作版画誌の系譜』／「土肥耕美園」「今西商店」(インターネット検索)(樋口)

土肥博隆(どひ・ひろたか)

1941(昭和16)年の第10回日本版画協会展に木版画《風景》が入選。翌1942年は第19回白日会展に《バラ》、第17回国画会展に《静物》、第6回一水会展に《初秋》がそれぞれ入選したが、いずれも油彩画であった。国画会展出品時は東京市下谷区谷中清水町1番地に住む。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『白日会展総出品目録<第1回～第59回>』(白日会 1984)／『第十七回国画会展覧会目録』(1942)(三木)

土肥茗雲(どひ・みょううん) ➡土肥耕美(どひ・こうび)

飛田 仁(とびた・ひとし)

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒を対象に版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森、北陸などを回り、7月28～29日は北海道の名寄中学校(現・北海道立名寄高等学校)でエッチング・木版画・素描の講習会(講師:西田武雄、武藤完一、小野忠重など 参加者41名)を開催。当時、名寄中学校2年に在学していた飛田は、この講習会に参加し、その時の作品とみられる風景を描いた銅版画(題名不詳)が研究所の機関誌『エッチング』第70号(1938.8)に掲載されている。名寄中学校には版画教育に熱心な教諭の松田操がおり、生徒に講習会の感想文を書かせていて、飛田の感想文「講習の感激と希望」も同号に掲載されている。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70(1938.8)／『エッチング』70(加治)

富岡永洗(とみおか・えいせん) 1864～1905

元治元(1864)年3月信濃国(長野県)松代に生れる。本名は秀太郎。父富岡判六は信州松代藩士で、幼少期に絵の手ほどきをするも13歳の時に死別。その後、伝手を求めて上京、陸軍参謀本部に出仕し製図の仕事に携わった。1882年、18歳の時に小林永濯(狩野派画工・浮世絵師)に入門「永洗」号を受ける。8年間修業。師とともに『風俗画報』の挿絵を描くも、1890年の師永濯の死去を機に画業専念のために官職を辞した。1892年、『都新聞』に入社して専属の連載小説挿絵を担当。1898年日本画会結成に参加し評議員となるが後に退会。同年創立の日本美術院の特別賛助員。日本絵画協会5回・日本美術院第1回連合絵画共進会に《今様美人》で一等褒状受賞。後年は肉筆画にも精力を傾けている。1905(明治38)年8月3日逝去。若い死去だが出版物の版下仕事は多量で口絵、挿絵に人気があり一世風靡した。博文館と密接で、『文芸倶楽部』の木版彩色口絵を1895年から没年まで継続的に担当。博文館「少年文学」シリーズの『太閤秀吉』、『新太郎少将』、『河村瑞賢』、『近江聖人』、『雨の日ぐらし』、『姉と弟』、『甲子待』等の表紙絵・口絵等。他に春陽堂からは村井弦齋の一連の著の口絵、扶桑堂からの黒岩涙香の一連の著の口絵と活躍。明治の代表的艶画『八雲の契り』は永洗の仕事とされる。口絵では美人画、歴史武者絵に優れ、挿絵にも闊達ぶりが評価される。渡辺省亭に師事するなど画業向上への努力を惜しまなかった。門下生としては、宮川春汀、井川洗崖、谷洗馬などがいる。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)(岩切)

富田溪仙(とみた・けいせん) 1879～1936

1879(明治12)年12月9日博多の旧福岡藩御用商人の家に生まれる。本名鎮五郎(しげごろう)・字は隆鎮、雪仙・溪山人と号す。1881年旧福岡藩御用絵師であった衣笠探谷から狩野派を学んだ後、1897年京都の都路華香から四条派を学ぶ。1899年には日本美術院展第2回で《鯉》《鶯》を出品、以後新古展を中心に出品。1911年文展第6回に《鵜船》、翌年の第7回展に《沈電容漆》を出品しているが、1914年再興日本美術院展に参加し院友に推挙、翌年に同人となる。以後、亡くなるまで、院展を主に活躍し、1933年第20回展の《御室の桜》で画境を極め、横山大観に多大な影響を与える。その間、1921年に仏国大使として来日した詩人のポール・クロードルとの交友は知られるところで、クロードルは在任中(～1927)しば

しば京都嵐山の溪仙の画宅を訪ね親交を深める。翌年新潮社から刊行された『SAINTE GENEVIEVE (聖ジュヌヴィエーブ)』の巻末に収録された「江戸城内濠十二景」では、クロードレルの詩に溪仙が絵を附し、伊上凡骨が多色木版に起こしている。1927年10月、クロードレルの俳風短詩に溪仙の俳画を付した扇面画集『四風帖』(4点 山濤書院)、12月にその4点とクロードレルの短詩と溪仙の絵各16点を加えた『雉橋集』(36点 日仏芸術社)、翌年には『百扇帖』を合作している。他に版画では『現代俳画集 春之部』(俳画堂 1915)に俳画を、『山鹿素行の感化』(1920)、柳屋から『宝船』(『美術と文芸』16 1920)、山内義雄訳『仏蘭西詩選』(新潮社 1923)に凡骨木版の挿画、『新進花鳥画集』(マリア画房 1931~33)に『御室の桜』、『凡骨版画集』(凡骨版画会 1934)に『柳に白鷺』等の多色木版の原画を描いている。著書に『溪仙八十一話』(下店静市編 改造社 1925)や『無用の用』(人文書院 1935)がある。1936(昭和11)年7月6日京都で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和12年版(美術研究所 1937) / 谷口薫「ポール・クロードレルと奈良」『四国大学紀要』46(2016 <http://www.shikoku-u.ac.jp/education/docs/A46p153-160>) (森)

富田鋼一 (とみた・こういち)

富田は北海道小樽市堺小学校の教師をしていた1934年、小樽と思われる風景をエッチングにして、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第22号(1934.8)に発表している。その同じ頁には阿部新一の作品も掲載されているが、阿部は1929年4月から小樽中学校で教鞭をとっており、1934年3月に日本エッチング研究所製プレス機を購入している。このことから、そのプレス機を使用して、小樽における教員仲間でのエッチング制作を行っていたのではないかと考えられる。翌年3月、阿部は岩見沢高等女学校に転勤となり、その後は富田の版画制作も途切れてしまったのか、上記以外の作品は確認されていない。【文献】『エッチング』22 (加治)

富田秋香 (とみた・しゅうこう) 1868 ~ 没年不詳

栃木県に生まれる。小林永濯に師事、三島蕉窓や鈴木華郎にも教えを受ける。「円青」と号し、人物画を得意とした。永濯没後、版下絵を自習し、『東京日日新聞』に挿絵を描く。梶田半古主宰の「白光会」にも所属する。塚原洪柿園『天草一揆』前後(古今堂 1907)の木版口絵や仏国人ピエール・バルブト(馬留武黨)『日清戦争版画集』(金光正男発行 1896)に木版画1図、田代古崖らと合作で『月刊 少年界』附録に彩色石版『飛行機旅行双六』(1910.1)の制作などがある。【文献】山田奈々子『増補改訂 木版口絵総覧』(文生書院 2016) (樋口)

富田憲義 (とみた・のりよし)

大分県大野郡で生野正義ら教員仲間は「大野版画協会」を立ち上げ、版画誌『大野版画』(1933~1934)を創刊。その第3号(1934.5)に『野の草』、第4号(1934.7)に『風景』を発表。武藤完一は『野の草』について「デリケートな彫りであるが、慾を云へば少し弱い。今少し黒のかたまりがほしい。名前が太すぎる」と「第3号評」に記している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

富田 寛 (とみだ・ひろし)

長野県須坂では、日本各地の版画同人誌に作品を発表

していた小林朝治が中心となって1933年に開催した「版画及び図画講習会」(須坂小学校 講師:平塚運一)を契機に、版画誌『櫟』(1933~1937)が創刊された。その第11輯(1936)に木口木版の『蔵書票』を発表。『蔵書票』に「H.TOMIDA」とある。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

富田不二夫 (とみた・ふじお) 1886 ~ 1982

1886(明治19)年福島県福島町中町に生まれる。本名は藤太郎。生家は紙商「白根屋紙店」を営む。若くして上京し、川端画学校で絵画、御茶ノ水の長谷川写真館で写真を学ぶ。最初の号は「香雪」。1910年4月に油井夫山(1884~1934 本名は中助 1908年東京美術学校西洋画科卒)ら福島市内の青年画家有志と福島県最初の洋画団体といわれる「アートクラブ」を結成。翌1911年に第1回展(4.23~24 福島公会堂)を開催し、油彩画・水彩画・写真を出品。翌年の第2回展にも油彩画・写真などを出品した。1913年家業の三代目を継ぐため帰郷し、「藤五郎」を襲名。同年5月には「アートクラブ福島写真研究会」を足立させた。1914年雅号を「不二夫」と改名。家業は家人に任せ、「アートクラブ」を発表の場とし、絵画・写真の制作に励んだ。1923年10月の「福島洋画会」の結成に参加。11月の第1回展に木版画6点を出品するも、以後出品の記録はない。絵画は晩年まで描いていたようである。1982(昭和57)年福島市で逝去。【文献】村山鎮雄『福島の近代美術』(三好企画 1992) (三木)

富永 郁 (とみなが・いく)

1925年6月発行の『マヴォ』5号に幾何学的構成からなるリノカット『無題』を寄せている。この作品は、岡田龍夫が誌面構成した萩原恭次郎詩集『死刑宣告』にも作者が「富永玄矩」として掲載されていて、二つの名前の人物が同一であることがわかる。『マヴォ』7号にはこの富永玄矩訳として「群衆・人間―ケネス・マツクゴワン」が掲載されている。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) (滝沢)

富永太郎 (とみなが・たろう) 1901 ~ 1925

1901(明治34)年5月4日東京市本郷区湯島此花町に生まれる。1919年東京府立第一中学校を卒業し仙台の第二高等学校理科乙類に入学。はじめは生物学志望だったが、やがてニーチェやショーペンハウアーに耽溺、またボードレールに熱中した。1921年フランス語を学ぶ一方で仙台洋画研究所に入所して絵を習い始め、表現主義的作風の『自画像』等の油彩画を制作した。この年12月に人妻との恋愛問題から退学し、翌1922年に東京外国語学校本科仏語部文科に入学するも、1923年不眠症の影響で出席日数が不足して留年、そのまま休学して川端龍子の画塾に通った。また本郷の菊坂洋画研究所にも通い、7月から8月にかけて油彩画『Coin de Jardin』(M^{me} Met sa fille)などを制作する。さらにこの年、表現主義的作風の『クリスマス・ローズ』や『壺』、マヴォのリノカットを思わせる『Komposition』、白と黒のコントラストが際立つ『Promenade』などの木版画を制作した。11月上海を訪れ、翌1924年2月に帰国、その頃画家になることを志して菊坂洋画研究所に通った。この年大正期の新興美術運動に感化された『自画像』や『コンポジション』、上海に取材した『上海の思ひ出』などの油彩画を制作。同年6

月二高時代の友人で京都帝国大学の学生であった正岡忠三郎を訪ね、12月まで京都に滞在、その間立命館中学在学中の中原中也を知って交友する。その一方、府立一中時代に一学年下にいた小林秀雄のすすめで同人誌『山繭』に加入する。10月に咯血、病と闘いながらも『山繭』創刊号(12月)に「橋の上の自画像」「秋の悲嘆」を発表、ひきつづき翌1925年発行の同人誌に硬質な文体による象徴主義的散文詩を発表し、詩人として高い評価を得た。この年3月神奈川県片瀬に一旦転地したが逃げ出して東京府富ヶ谷の自宅に帰る。小林秀雄とともに『山繭』を脱退、まもなく病床に就いた。この年(1925)11月12日逝去。1926年11月に『山繭』追悼号が発行されたほか、1927年に友人村井康男編集で『富永太郎詩集』(私家版)が刊行されたが、表紙は富永の木版画《クリスマス・ローズ》で飾られた。【文献】大岡昇平編『富永太郎詩画集』(求龍堂 1972) / 『大正の詩人画家 富永太郎展』図録(渋谷区立松濤美術館 1988) / 『中原中也と富永太郎展』図録(神奈川近代文学館 2007)(滝沢)

富本憲吉(とみもと・けんきち) 1886～1963

1886(明治19)年6月5日現在の奈良県生駒郡安堵町に生まれる。1904年東京美術学校図案科入学。建築と室内装飾を専攻、1907年の東京勸業博覧会でステンドグラス図案が入選。翌年11月、私費で渡英。ウィリアム・モリスや世界各地の工芸品、イスラム建築などへの造詣を深めて1910年6月帰国。帰りの船で親しんだレジナルド・ターヴィを介してバーナード・リーチと出会う。1911年リーチとともに参加した美術家の会合で楽焼きを試み、魅了される。楽焼きのほか家具や染織品、刺繍や装幀などを広く手がける時期を経て1915年安堵に築窯、本格的な作陶活動に入った。研究と実験の蓄積から独自の白磁や染付の完成に至り、1928年東京に築窯、戦後は京都で作陶を続け、華麗な色絵金銀彩を展開した。1955年第1回重要無形文化財保持者となり、1961年文化勲章受章。1963(昭和38)年6月8日大阪市の病院にて逝去。

1910年に帰国してしばらく、集中して木版画を手がけた一時期があった。ヴィクトリア&アルバート美術館でアンリ・リヴィエールの木版画を見たのがきっかけといい、同年9月から新宿柏木で南薫造と共同生活をするなかでともに始めた。最初期の作例に水木要太郎に宛てた11月11日の絵葉書があり、荒削りな馬の図案に添えて「上記は小生の新発見にて候。木版製法によりたる自刻に候」と記されている。1911年1月号より『美術新報』のカットが始まり、5月に安堵に戻って以降も木版制作は続く。現在知られるものを列挙すると、1911～12年頃の風景や壺に取材した一枚摺、同じ頃の木版による団扇、1912年の『和泉屋染物店』(木下空太郎著・東雲堂書店)装幀、1913年の『とりで』(とりで社)2号表紙と裏絵、1914年の『番紅花』(東雲堂書店)創刊号と1巻3号の表紙や扉絵(1巻3号表紙は尾竹一枝らとの合作)、1914年の『藝美』(三笠美術店)2号挿画、1914～15年の『卓上』(美術店田中屋)全6冊表紙、1915年の『唐草表紙』(木下空太郎著・正確堂・彫りは伊上凡骨)装幀、1915年の『富本憲吉模様集第壹』(美術店田中屋・自刻自摺木版17葉を含む)、1915年前後の蔵書票、1916年の『美術と文藝』(柳屋書店)6、7号表紙がある。加えて1911年にリーチに学んだETCHINGを用いた作例もある。版画は展覧会でも披露され、1911年4月の「美術新報主催新進作家小品展覧会」および翌年3月の「美術新報主催第3回美術展覧会」(第三部

は富本の個展)では他の工芸品とともに自刻自摺の版画が展示された。南薫造への書簡によれば、1911年秋に早くも「版画展覧会」が構想されている。こうした仕事は、当時開店の相次いだ小画廊や美術書店の支持を得て展開したものであった。たとえば田中屋は1914年9月、画廊内に富本憲吉図案製作事務所を置いており、柳屋書店は富本に木版による包紙や用箋、暖簾や法被、天井絵などを依頼し、店をいわば富本の趣味で統一するような試みをしている。

富本の版画は、自身の美意識で暮らしを彩るという視点から建築や家具、器や絵画を等価にとらえるなかで自然に自刻自摺が発想された、版画史から独立して存在するものである。またあえて道具も揃えず版の抵抗をそのままに見せるナイーブな造形が、プロにはなしえない強さと魅力を放つ稀有な一群といえる。陶芸に専心するまでのごく短い制作期間であったが、ごく早い時期の自刻自摺であり、後進への影響も大きい。たとえば工芸界では藤井達吉や津田青楓、河合卯之助に類作があり、創作版画界では恩地孝四郎や平塚運一が山本鼎らとは別の流れを導いた先駆者として富本に言及している。日本創作版画協会は『版画』創刊号(1921.11)の「本誌創刊と版画及創作版画に就て」に寄稿を求めている、日本版画協会は創立にあたり富本を会員に迎え(ただし同年退会)、1939年の第8回日本版画協会展では「特別陳列版畫〔發〕達史的展観第二 南薫造・富本憲吉版畫作品」として富本の作品19件を展示し、その仕事を顕彰した。【文献】富本憲吉(談)「私の版画」『日本版画協會々報』(1940.2) / 『南薫造宛 富本憲吉書簡(大和美術史料 第三集)』(奈良県立美術館 1999) / 『日本の版画Ⅱ・1911-1920・刻まれた「個」の饗宴』図録(東京新聞 1999) / 『モダンデザインの先駆者 富本憲吉展』図録(朝日新聞社 2000) / 『生誕120年 富本憲吉展』図録(朝日新聞社 2006) / 山田俊幸「富本憲吉・ギャラリー「三笠」の時代」『帝塚山学院大学日本文学研究』40(2009.2)(西山)

外山卯三郎(とやま・うさぶろう) 1903～1980

1903(明治36)年1月25日和歌山県南部町の生まれ。東京に育つ。1922年北海道帝国大学予科に進み、在学中に演劇や詩、美術に没頭。関東大震災の後、東京下落合の実家に帰省中、当時上落合にいた村山知義を訪ねて前衛劇や新興美術に目を開かれる。以後も東京と札幌を往復するなかで、1924年6月頃から研究会を構想し、翌年4月に詩と劇の研究を掲げた札幌詩学協会を創立。この場合の「詩」には音楽と文学、美術が含まれ、同年6月、同会から北大生を主な同人とする詩と版画の雑誌『さとぼろ』を創刊。1926年3月発行の2巻3号(通巻9号)まで編輯兼発行人を務め、相川正義や伊藤義輝ら幾人もの版画家を世に出したほか、自身も前衛詩や創作版画を発表。同誌は『詩と版画』をモデルとしたが、外山の詩や版画は『マヴォ』の影響を強く感じさせるダダイスティックなものであり、その先鋭的な思考は同人たちを大いに感化した。1925年9月三科公募展に出品、10月に第1回道展が開かれた際にはその審査方法に抗議し、翌月急遽アンデパンダン方式で札幌詩学協会主催洋画展を開催している。1926年2月離札、京都帝大に進み(1928(昭和3)年3月美学美術史専攻卒業)、新興美術とは距離を置くようになる。離札以降は『さとぼろ』の時代から試みていた美術評論の分野で活躍、夥しい論考や著書を残し、特に一九三〇年協会とその後身たる独立美術協会

を理論的に支えたことで知られる。

版画の制作は1925年のみと考えられ、『さとぼろ』収録作品、4号(1925.9)の表紙・裏表紙・扉絵、5号(1925.10)の《消極的戦闘母艦》、6号(1925.11、版画記念号)の《座せる女像》(いずれも単色木版)が知られるばかりだが、同誌は北海道における創作版画の先駆となり、1925年10月に開催した「札幌詩学協会第1回版画展」は初の創作版画展となった(外山自身は《梅毒性淫売婦の死》など11点を出品したという)。また『さとぼろ』は外山の離札後も相川正義らを編輯兼発行人として1929年9月の29号まで存続し、1926年9月に「第2回版画展覧会」、1927年10月に「壺と版画の展覧会(第3回版画展覧会)」、1928年3月には「版画小品展」を開催するなど、外山が札幌の地に蒔いた版画の種は豊かに実ったといえる。後年の1978年、「日本に於ける創作版画の運動と雑誌〈さとぼろ〉を中心とする版画活動」を執筆(『札幌・大正の青春-雑誌「さとぼろ」をめぐって』所収)、自身の活動を創作版画史のなかに位置づけ、回顧した。1980(昭和55)年3月21日静岡県御殿場市にて逝去。【文献】西村勇晴「北海道の「創作版画」-雑誌「さとぼろ」を中心として-」『北海道立近代美術館研究紀要』創刊号(1977)／『札幌・大正の青春-雑誌「さとぼろ」をめぐって-』(札幌市教育委員会 1978)／井内佳津恵『田上義也と札幌モダン-若き建築家の交友の軌跡』(北海道立近代美術館編ミュージアム新書〔22〕北海道新聞社 2002)／大谷省吾「美術批評家列伝6:外山卯三郎-「純粹絵画」の名のもとに」『近代画説』11号(明治美術学会 2002)／『創作版画誌の系譜』／『特別展「さとぼろ」発見』図録(北海道立文学館 2016)(西山)

豊 不学(とよ・ふがく)

本名は不明。1932(昭和7)年に和歌山県新宮町で杉本義夫・新田穰が中心になって結成した「熊野きつつき会」に参加。第1回版画展(5.19~21 会場不明)に《御燈祭》《山水》を出品した。【文献】『第一回版画展覧会出品目録』(熊野きつつき会 1932)(三木)

鳥居一吉(とりい・かずよし)

1936年8月28・29日、西田武雄を講師に招いて豊橋中学校で開催された豊橋講習会や同年9月23日に同校で開催の豊橋エッチング協会例会に参加しエッチングを試作。豊橋エッチング協会会員に名を連ねる。【文献】『エッチング』47・48(樋口)

鳥居清忠(とりい・きよただ) 1875~1941

1875(明治8)年3月28日鳥居清貞の長男(斎藤長吉)として東京に生まれる。芝居看板、劇画を父から学び、1889年8月からは川邊御植に学び土佐派を修めた。鳥居家六代清満から七代を継ぎ家業を継いだ。芝居絵看板描法に伝統を守り力量を発揮した。挿絵画家としても活動し、『演芸画報』、『新演芸』などの明治、大正の演芸雑誌になくはない存在であった。芝居絵、役者絵を描き「劇画堂」の号も使用した。又錦絵制作の版下の筆も執った。1941(昭和16)年8月3日脳神経麻痺で牛込矢来町の自宅で逝去。なお、子息清言も八代目「清忠」を襲名、「鳥居言人」の項目を参照されたい。ちなみに九代清忠は八代目清忠(言人)の娘、画名鳥居清光が継いでいる。【文献】『日本美術年鑑』1942年版(美術研究所 1943)(岩切)

鳥居言人(とりい・ことんど) 1900~1976

鳥居清忠の長男として、1900(明治33)年11月21日日本橋区蛸殻町一丁目四番地に生まれる。本名齋藤信、幼少から父の七代目清忠から鳥居派の画法を学んだ。1914年立教中学を中退し小堀鞆音塾に入って土佐派を学ぶ。1915年に言人(名の「信」を言と人にかけて雅号とした)を名乗り、『演芸画報』をはじめ雑誌の挿絵を描くようになり、家業の看板絵も手がけるようになった。1918年から、鎭木清方に師事し美人画を描く。美人版画制作は1929年から1935年にわたって制作。1929年には『創作版画/昭和風俗美人集』(ただし『浮世絵誌』11号掲載広告にある題)として創美会(酒井好古堂)から限定300部で刊行開始、《化粧》《長襦袢》《雨》《雪》《湯気》《髪梳き》を制作、《紅》《帯》(川口版)を制作。1930年には《化粧》(川口版)、《朝寝髪》《うたた寝》《あやめ浴衣》(以上は池田版)を制作。《朝寝髪》は70部摺られたが警視庁に没収された。1931年には《おぼろ春》《盃》《ぼたん雪》(以上池田版)を制作。1933年《湯がへ里》《髪梳き》《もみじ》(以上池田版)。1934年に《夏妓》《夜の梅》(池田版)を制作(なお池田版は池田富蔵を版元とし当初は彫を前田謙太郎、摺を小松欣之助が担当かと推定)。1935年には清言(きよのぶ)と改称。主に舞台美術、映画での時代考証や美術関係の仕事に携わる。1941年父(清忠)死去に伴い鳥居家八代目当主となる。1952年、美人画《髪》が日展入選。1962年、七代目の名跡を継承し、清忠と改称。1966年から1972年まで日本大学芸術学部演劇科講師として舞台美術を教える。1970年忠雅急逝のため、鳥居家看板絵を描くものなく再び歌舞伎座等の看板絵を描いた。1976(昭和51)年7月13日逝去。【文献】「鳥居言人氏の版画」『浮世絵界』1-3(浮世絵同好会 1936.5)／『日本美術年鑑』1977年版(東京国立文化財研究所 1979)／高島匡夫『鳥居言人』(ギャラリー紅屋 1995)(岩切)

鳥居忠雅(とりい・ただまさ) 1904~1970

1904(明治37)年12月11日東京本郷森川町(尾沢蒼生堂薬局の長男)に生まれる。鳥居派七代の鳥居清忠の高弟で、挿絵画家としても活躍し日本劇画協会同人。本名は上野克己、18歳で鳥居清忠に入門。歌舞伎の似顔絵肉筆画を学び、「忠雅」の号を許された。1943年以来、歌舞伎座、帝国劇場、東劇、演舞場、三越劇場、御園座、国立劇場などでの鳥居家流の芝居看板絵を没年まで描いた。1949年11月に鳥居家から「鳥居」の名の使用を許され「鳥居忠雅」を名乗った。版画(多色摺)では鳥居派伝統の筆法を生かした『芝居絵木版画 限取十八番』(版元・渡辺木版画舗)があり、1941年4月から頒布を開始し、初回二図《梅王の筋隈》《朝顔仙平隈》で、以後毎月一図宛配布され《平九郎鬼女の隈》《朝比奈猿隈》《公家荒の隈》《赤塗筋隈》《景清の忍隈》《梶原親子隈》《助六のむきみ隈》《日の出に鳥隈》《土蜘蛛の隈》《和藤内の一本隈》《二人知盛の隈》《不動の隈》《松王二本隈》《剣先隈》《蟹隈》《狐の隈》《寿三番叟》(番外)の19枚(一図5円)で、1943年2月には上野松坂屋画廊で完結の展覧会が開催された。また、頒布途中の1941年11月には劇画肉筆17点を展示した「上野忠雅劇画展」(会場・渡辺木版画舗)が開催された。好評を受けて直ぐに『続限取十八番』が企画されたが戦争で中断した。『歌舞伎限取図説』(彰国社 1943)、鳥居流の『歌舞伎十八番』(彰国社 1952)等も刊行している。1970(昭和45)年5月13日逝去。【文献】和田辰雄「上野忠雅筆芝居絵版画『限取十八番』について」

『大和絵研究』1-4 (研石社 1942.5) (岩切)

鳥居雅隆 (とりい・まさたか) 1914 ~ 2002

1914 (大正3) 年山梨県東八代郡豊富村に生まれる。甲府一高を卒業し、東京美術学校油絵科に入学。藤島武二に師事。池袋モンパルナスに住み、在学中より本の装幀・挿絵やマッチ箱、タバコのデザイン等を手掛ける。卒業後、徴兵で満州に赴き、1945年シベリヤに抑留される。1948年帰国後は世田谷で画塾を開き、1954年から2年間パリのアカデミーグランドシヨミエールで学ぶ。1956年二紀会同人推挙、1975年より二紀会理事を務めた。2002 (平成14)年逝去。東京美術学校油絵科4年在学当時(1937頃)、一年後輩の遠藤健郎や高田 (浜田) 知明らとともに同校版画教室エッチング部に所属する。【文献】『エッチング』57 / インターネット検索「洋画家 鳥居雅隆」(2017.2.20) (樋口)

鳥居緑子 (とりい・みどりこ)

1932 (昭和7) 年1月の第9回白日会展に木版画《リアントネット》が入選。棟方志功には、「目に入れる程の物でない」(『第九回白日会展批評』『版画CLUB』4-2)と評された。また、6月の第2回日本版画協展にも「ミドリ子」の名で、木版画《蒙古婦人》《コンタツを持つ少女》が入選している。【文献】『第二回日本版画協会展覧会目録』(1932) / 『白日会展総出品目録<第1回~第59回>』(白日会 1984) / 棟方志功「第九回白日会展批評」『版画CLUB』4-2 (1932.3) (三木)

【な】

内藤三郎 (ないとう・さぶろう)

明治期に発行された石版印刷業界誌『虹』第1巻1号(1908.2)に《拍手》、第1巻6号(1908.7)に《当選者と落選者》、第1巻7号(1908.8)に《夏》、第1巻10号(1908.11)に《世渡り1~5》の5点、第1巻11号(1908.12)に《同行二人》の石版画を発表。そのほか第1巻1・8・9号(1908.2~10)、第2巻7号(1909.7)、第3巻3号(1910.3)の表紙絵の図案製版を担当している。現在、『虹』は第1巻1号~第3巻6号(1910.6)のうち19号分が確認されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

内藤敏雄 (ないとう・としお)

1932 (昭和7) 年4月東京美術学校彫刻科木彫部に入学。校友会版画部に属し、7月に開かれた第14回版画部展覧会(16~17 東京美術学校講堂前廊下)に出品した。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997) / 伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010) (三木)

内藤政勝 (ないとう・まさかつ) 1906 ~ 1982

1906 (明治39) 年12月29日栃木県足尾町 (現・日光市) に生まれる。造本家。雑誌『書窓』に魅せられて発行人の志茂太郎を訪ね、その道に入る。1935年より造本を手がけ、特に1942年頃志茂を介して関野準一郎と知り合ってから版画を贅沢に用いた豪華本の数々を世に送った。代表的なものに関野準一郎『絵本西遊記』(1943)『雨月物語』(1944・45)、若山八十氏『河童愛情記』(1948)、関野『古事記絵巻』(1949)、恩地孝四郎他『博物譜』(1950)

などがある。自身の版画としては武井武雄が主催した賀状交換会「榛の会」第9~20回への参加が知られる。1982 (昭和57) 年12月26日朝霞市にて逝去。【文献】『書物と人生: 酒井徳男 内藤政勝 愛書対話集』(水曜荘文庫1969) / 内藤政勝『造本覚え書 (古通豆本・30)』(日本古書通信社 1977) / 八木福次郎「青園荘 内藤政勝さん(愛書家・思い出写真帖27)」『日本古書通信』932号(2007.3) / 市道和豊『軌跡の成立 榛の会昭和21年: 芸術集団の戦中・戦後』(室町書房 2008) (西山)

中 一弥 (なか・かずや) 1911 ~ 2015

挿絵画家。1911 (明治44) 年1月29日、大阪府北河内郡大和田村 (現在の門真市) に生まれる。1927 (昭和2) 年、16歳の時に当時活躍の挿絵画家・小田富弥のもとに入門し住み込む。1929年、18歳の時に小田富弥の東京進出に伴い上京。同年、師の推薦で直木三十五『本朝野士縁起』の挿絵を描き斯界にデビュー。多くの時代小説挿絵を描く、1941年野村胡堂『銭形平次捕物控』(『オール読物』連載)、1948年山手樹一郎『夢客千両みやげ』(『読物と講談』連載)、1972年池波正太郎『剣客商売』(『小説新潮』連載)、『仕掛人・藤村梅安』(『小説現代』連載)等が一般的に知られる。1985年日本出版美術家連盟会長。2015 (平成27) 年10月27日肺炎で死去、104歳であった。長谷川伸賞、菊池寛賞、吉川英治文化賞受賞。なお、小説家逢坂剛は三男にあたる。【参考】中一弥・末國善己『挿絵画家・中一弥』(集英社新書 2003) (岩切)

仲 印一 (なか・ぎょういち)

東京府下野方の沼袋にあった日本印刷学校の版画研究会は「常に印刷に関はってゐる関係上、石版、銅版など復興的な仕事をやっておりますが、創作の上にもいゝ作品、作者が現れること、信じます。」という考えにより『日本印刷学校 創作版画作品集』を発行する。その第2輯(1932.3)に《アオキ》を発表。『版画CLUB』4年3号(1932.3)の「新刊紹介」において、評者藤森静雄は「大変いいものである」とこの版画同人誌を高く評価している。創刊号は未見。なお、「日本印刷学校」は社会教育者・社会運動家である希望社の後藤静香が勤労教育実践のために印刷技術者の養成学校として設立したものの。【文献】『日本印刷学校 創作版画作品集2』 / 「勤労女学校や印刷学校も設立した希望社の後藤静香」(インターネット検索『神保町系オタオタ日記 2016-09-23』) (加治)

中 平之助 (なか・へいのすけ)

➡水内平一郎 (杏平) (みずうち・へいichiro / きょうへい)

永井喜由 (ながい・きよし) 1905 ~ 没年不詳

1905 (明治38) 年10月15日生まれ。1942年に静岡市で開かれた第13回童土社版画展(11.7~10 静岡・吉見書店画廊)に《郊外風景》《海辺》《風景》を出品。出品時は、静岡県町村会事務局長を務める。また、1967年頃は静岡県市町村職員共済組合と静岡県旧市町村職員恩給組合資産管理事務局長を務め、静岡市西千代田町に住む。【文献】『第十三回童土社版画展覧会出品目録』(1942) / 中川雄太郎『静岡県版画史話』(童芸工房 1967) (三木)

中井句骨 (なかい・くこつ)

台湾で網干利根が中心となって発行した版画と文芸の同人誌『阿をきび』第1巻3号(1932.10)に《菖蒲》《守宮》

と裏表紙絵《蔵票》を発表。また、東京の料治熊太が発行した機械刷り版画誌『版芸術』第9号(1932.12)「全日本版画家年賀状百人集」に年賀状を、その後、同じ料治が発行した版画誌『白と黒』第33号(1933.3)に中井義彦の名で《やもり》を発表する。《やもり》は『阿をきび』第1巻3号の《守宮》と同作品。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

永井東三郎(ながい・とうざぶろう)

1932(昭和7)年11月の第1回関西創作版画展(3~6京都府植物園内大正記念館)に《パイプ》《秋の終り》《静物》《工場》を出品。この永井は、京都市出身で、「美術文化協会」の創立に参加した「永井東三郎」と同一人である可能性が高い。美術文化協会の永井は、生没年は不明であるが、京都市六角通東洞院東入の生まれ。1934年か、帝国美術学校西洋画科に入学。在学中、1937年の第7回独立展に油彩画《風景》が入選。その後も第8回展(1938)に《作品》、第9回展(1939)に《作品》を出品。また、同級生の大塚耕二・長谷川宏らが結成していた前衛的な絵画グループ「表現」(第1回展:1936.1)に1937年6月の第5回展から参加。翌年12月の第8回展には《作品》3点・《寄生物》3点・《フィンガー・ピクチュア》を出品している。1939年帝国美術学校を卒業。同年5月の「美術文化協会」の創立に参加し、翌1940年4月の第1回展に《作品I》《作品II》・オブジェ《作品B I》《作品B II》、7月の美術文化名古屋グループ展に《作品》(賛助出品)、11月の奉祝紀元二千六百年秋季展に《習作A》《習作B》を出品した。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『〔京都府総合〕資料館紀要』12(1984)／『会員名簿 昭和拾七年貳月』(帝国美術学校校友会 1942)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『古沢岩美美術館月報 No.25 特集号 現代美術のバイオニア展』(1977.6)／『日本のシュールリアリズム 1925~1945』展図録(名古屋美術館 1990)(三木)

中井平三郎(なかい・へいざぶろう) 1897~1943

1897(明治30)年3月25日和歌山県海草郡に生まれる。1914年和歌山県立和歌山中学校を卒業。電気技師を目指し、戸畑の明治専門学校電気科の試験を受けるも失敗。その後、病気となり、療養の傍ら水彩画を描く。1918年10月京都の関西美術院に入り、本格的にデッサン・洋画を学ぶ。1920年上京し、東京美術学校を受験するも失敗。太平洋画会研究所・川端画学校に通う。1924・25年頃か、京都に戻り、1926年結婚。京都では洋画家太田喜二郎らに師事し、また時期は不明であるが、ルフラン製のプレス機を入手し、エッチングを独習。1932年の第1回関西創作版画展(11.3~6 京都府植物園内大正記念館)に銅版画《幼児の寝顔》《顔》(各ドライポイント)《母子像》(アクアチント)を出品した。1934年の大札記念京都美術館美術展〔招待展〕には油彩画《裸婦》〔売価500円から判断〕を出品したが、翌年の第1回京都市展に入選した《早春の夕》は、売価が80円であることからエッチングの可能性が高い。1936年2月に大阪で開かれた西田武雄の「エッチング座談会」(7 心齋橋・不二家喫茶店)に自作を多数持参し、批評を受けているが、この頃から本格的にエッチングに取り組んだようである。3月の『エッチング』第41号に「エッチング余談」を寄稿。その後、西田の指導で「京都エッチング協会」を設立。8月に西田を招いて「京都エッチング協会第1回エッチング講習会」

(8~9 京都・関西小国民社)を開催。助手を務めた他、自宅(京都市上京区相国寺北門前上ノ町、10月頃に上京区塔之段敷ノ下町421へ転居)でも毎月1回研究会を開催し、京都でのエッチング普及に努めた。10月には文展鑑査展(1936)にエッチング《吉田山より見たる京都市の一部》が初入選。その後も第2回新文展(1938)に《建築作業場》、第3回新文展(1939)に《西陣の織匠》が入選した。その間、1937年には『エッチング』第53号(1937.3)に「自己を語る」を寄稿。続いて最初の個展(中井平三郎エッチング展 4.21~25 大阪・美術新論社画廊)を開催し、20点を展示。また、同年の第2回京都市展に《斜陽の丘》《日時計》を出品。その後も第3回展(1938)に《石切場》、第4回展(1939)に《湖畔の春》を出品した。1938年8月からは、大分の武藤完一との交友が始まり、武藤の主宰する『九州版画』第20号(1939. 11. 10)に《かみ切虫》(1938.6.21作)、第23号(1941. 6. 25)に《ひとで》を発表した。1940年12月には、西田が主導した「日本エッチング作家協会」の結成に評議員として参加。第1回展(1940)に《京都風景》、第2回展(1941)に《工事場(文展)》を出品するも、1941年秋頃から健康がすぐれず、一家で和歌山に帰省。翌年7月の第3回展に《京都風景》に出品したが、最後の展覧会発表となった。1943(昭和18)年3月28日和歌山市新堀北ノ丁で逝去。武藤はその死を惜しみ、『日本版画』126号(1943.7)に追悼文「中井平三郎君を悼む」を寄稿した。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『〔京都府総合〕資料館紀要』12(1984)／『浅井忠と関西美術院展』図録(府中市美術館他 2006)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『エッチング』40・41・42・45・47・48・49・53・55・58・96・101・114・123／『日本版画』126／『創作版画誌の系譜』(三木)

永井正隆(ながい・まさたか)

長野県須坂では、日本各地の版画同人誌に作品を発表していた小林朝治が中心となって1933年に開催した「版画及び図画講習会」(須坂小学校 講師:平塚運一)を契機に、版画誌『櫟』(1933~1937)が創刊された。その第1号(1933.8)に《寺》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

中井康之(なかい・やすゆき)

1936(昭和11)年の第5回日本版画協会展に木版画《試作(II)》が入選。また、1938年の第2回自由美術家協会にも《作品〇》〔油彩画か〕が入選した。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

中井義彦(なかい・よしひこ) ➡中井句骨(なかい・くこつ)

中江恒治(なかえ・こうじ)

別名は讓。1936(昭和11)年の第11回国画会展に木版画《ギニョール》が初入選。翌年の第12回展に《ピアノ座》、1939年の第14回展に《机上》が入選した。その後、改名したのか、「讓」の名前で1940年の第9回日本版画協会展に《青い壁》、翌年の第10回展に《赤い壁》《室内》、1942年の第17回国画会展にも《しちやとさんばつや》《電話のある部屋》が入選。1944年には日本版画協会会友に推挙された。なお、「中江恒治」と「中江讓」の関係につ

いては、国画会の第14回展目録に記された住所が「神戸市神戸区元町三丁目四五柴田方」とあり、第17回展目録も同じ住所なので同一人とした。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『第十四回国画会展覧会目録』（1939）／『第十七回国画会展覧会目録』（1942）／『日本版画協会会報』37（1944.3）（三木）

長永治良（不屈）（ながえ・じろう／ふくつ）1893～1961

1893（明治26）年2月18日京都市上京区西陣東西町に生まれる。号は「不屈」。京都市立西陣尋常小学校を卒業し、西田画塾（詳細不明）や高田鶴州（京都図案協会会員）の住込み書生となり、帯地図案を学んだ。2年間の兵役後、高田から独立を勧められ、西陣の高級帯地の図案制作を業とした。その後、結婚して上京区大宮通寺之内下ル西入ル新美濃部町に居を定める。版画をいつ頃始めたのかは不明であるが、その活躍の時期を考えれば、京都では1928年に平塚運一による木版画講習会（12.14～17 画箋堂）が開かれ、約30名が参加しているので、長永もこの講習会を受講した可能性は高い。現在確認できる最初の版画の発表は、1930年10月の第1回京都工芸美術展（主催：京都工芸美術協会）であるが、木版画《小兒遊蟲》を出品し、いきなり特賞を受賞している。その後も、第2回展（1931）に《積み木》《出現（裸婦）》、第3回展（1932 東京でも開催）に《硝子器と果物》《女湯》が入選し、《硝子器と果物》で再び特賞を受賞。この受賞をめぐっては、他の版画家から審査のあり方についての抗議があった。第4回展（1933）と第6回展（1935）は入選作品名が不明であるが、第5回展（1934）に入選の《敦賀名所》では選匠賞を受賞。版画の受付が最後となった第7回展（1936）は、氏名は不明であるが13点の版画入選があり、長永がこの中に含まれている可能性は高い。また、この版画を発表していた時期は、在籍の期間は不明であるが、菊池契月の主宰する菊池塾にも学んでおり、塾の発表展である「菊池塾作画展」に木版画を出品。現在判明しているのは1931年の第7回展からで、同展に《雨の川口》、第8回展（1932）に《硝子器と果物》、第9回展（1933）に《海の子（海童）》《朝海》を発表した。その他の主な活動としては、1931年に大阪で開かれた全国版画展覧会（大阪・朝日ビル 主催：大衆版画協会）に《小兒遊蟲》（1930.5）《お手玉》（1931.1）《出現》《子供室》（各1931.4）《橋》（1931.5）を出品。この年、自作木版画の頒布会を催した。翌1932年には、第10回国際オリンピック大会芸術競技（ロサンゼルス）に《蟲相撲》（1930《小兒遊蟲》改題）を出品し、褒状を授与されたことは特筆される。また、同年の第1回関西創作版画展（京都府植物園内大正記念館）に《自画像》《お手玉》、この年の開催と推定される第2回京都創作版画会展に《蟲相撲》《水辺》《習作》を出品。全市学童創作版画展の審査員を麻田辨次・浅野竹二と務めた。1933年は第3回京都創作版画会展に《蟲相撲》《硝子器と果物》《積み木》《女湯》《橋》《お年玉》《月下に密会する男女》《裸女》《朝の海》と色紙《白梅に小鳥》《兜虫》を出品。また、阿部正晴・木村清太郎・政田英三と版画誌『興版』（編輯兼印刷者：政田英三）を創刊し、第1輯（5.20）に《表紙紙 子供と金魚》《ストープと裸女》《子ぶな》《風景》を発表した。なお、同誌は第2号まで刊行か。1935年には第4回日本版画協会展に木版画《硝子器と果物》を出品したが、その後の出品は無い。1936年頃を境に版画制作から離れたようであるが、

1937年に始まる日中戦争、1941年からの太平洋戦争と続く戦時体制の中では、本職である高級帯地の図案制作の仕事も減り、小学校の事務員のような仕事に転職し、さらに兵庫県明石市郊外に疎開して川崎航空機明石工場の守衛をしていたという。戦後は、病気のために制作から遠ざかり、入退院を繰り返したが、1961（昭和36）年4月20日逝去。長男が父のために開催した「長永治良版画展」（4.18・20・21 姫路商工会議所清交クラブ）の会期中のことであった。【文献】福永重樹「京都の創作版画家長永治良について」『サントリー美術館二十周年記念論集』（サントリー美術館 1982）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合』資料館紀要』12（1984）／『興版』1（1933.5）（三木）

中江 譲（なかえ・ゆずる）⇒中江恒治（なかえ・こうじ）

永尾鈍虻（ながお・どんみょう）

小野忠重『近代日本の版画』（三彩社 1971）の「資料編」によれば、1915年3月に創刊された自画木版画誌『樹海』（樹海社 横浜）に村田露地・鎌田緑峰らとともに木版画を発表したとされるが、作品は未見。【文献】小野忠重『近代日本の版画』（三彩社 1971）／河北倫明「第十四章 挿絵と版画」『近代日本絵画史』（中央公論社 1978）（樋口）

永尾政元（ながお・まさもと）

1922（大正11）年2月に神戸弦月画会主催で開かれた創作版画展（23～26 神戸・三宮三〇九番館）に木版画《あけがた》《風景》《女》を出品。出品時は大阪に住む。【文献】『神戸弦月画会主催創作版画展目録』（1922）（三木）

中川伊作（なかがわ・いさく）1899～2000

1899（明治32）年5月15日京都市に生まれる。本名は伊三郎。後に同門の日本画家西綾女と結婚して西姓に変わるが、作家名は「中川伊作」で通す。1918年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業し、京都市立絵画専門学校に進学。菊池契月に師事し、1921年同校を卒業。1928年の第7回国画創作協会展に日本画《日車》が入選。またこの頃、菊池塾の発表展である「菊池塾作画展」にも出品していたようである。1930年には、2年がかりで仕上げた「明治時代の舞妓」を主題とした日本画を第11回帝展に出品するも落選。その後、次第に日本画制作から離れたが、1934年の大札記念京都美術館美術展〔招待展〕には日本画《大原女》を出品した。版画は、1928年に平塚運一の主宰する『版』第5号（11.10）に木版画《かぶとむし》を発表しているため、この頃までには始めていたことが分かる。12月に京都で開かれた平塚による木版画講習会（14～17 画箋堂）にも参加。翌1929年1月には、講習会開催を機に京都の創作版画の作家たちが結集した「京都創作版画会」の会員となり、第1回展（2.1～5 京都大丸）に《少女》《肖像》《梳髮》《肖像》を発表。4月には絵画専門学校後輩の麻田辨次・浅野竹二・亀井藤兵衛・徳力富吉郎と「丹墨社」を結成し、第1回展（27～28 大毎会館）を開催。5月の国際美術協会第1回内国展（東京府美術館）に《裏町の娘》が入選するなど、一気に版画制作に傾斜して行った。また、この年の冬、初めて沖縄を訪れたが、同地の風物や焼き物（荒焼）などに強く魅かれ、その後も数回訪問。絵の取材に加え、後年の本格的な陶芸活動に繋がるが、荒焼の収集や作陶をおこなった。1930年に東京で木版画とスケッチによる最初の

個展 (11.22～28 上野・松坂屋) を開催し、《[琉球の女]》《[琉球の踊り]》《[襟巻きの女]》《[首里の門]》などを出品。翌1931年には第2回京都工芸美術展に《グランドマッセ》が入選し、選匠賞を受賞。また、大阪で開かれた全国版画展 (大阪・朝日ビル 主催: 大衆版画協会) に《南海の魚とパパイアの葉》(1930.5) 《クリスマス》(1930.12) 《文楽人形(弥次喜多)》(1931.1) 《文楽人形(熊谷)》(1931.2) 《琉球の乙女》(1931.11) を出品した。続く1932年、全国展である第7回国画会展に木版画《南海の魚とパパイアの葉》《守礼門》が入選。また「日本版画協会」の会員に推挙され、第2回展に《琉球島の女》《泊塩田》を出品。その後も第3回展(1933)に《南海の魚とパパイアの葉》《黒汐に泳ぐ》《鍵屋ノ辻(伊賀越仇討跡)》、「日本現代版画とその源流」展(1934.2 パリ・装飾美術館)に《黒汐に泳ぐ》《南海の魚とパパイアの葉》、第4回展(1935)に《琉球首里城》《琉球の婦人》《乙女》《紙治(文楽人形)》《弥次喜多の首(文楽人形)》《クリスマス》、「日本の古版画と現代版画」展(1936.2・5 ジュネーブ・マドリッド)に《黒汐に泳ぐ》など、「日本の古版画と現代版画」展(1936.7～1937.5 サンフランシスコなど欧米9都市を巡回)に《乙女》など、第8回展(1939)に《団七》《傾城》を出品したが、その後の出品はない。その間、京都でも京都創作版画会の第2回展(1932か)に《琉球守礼門》《四竹踊》《黒潮の魚》、第3回展(1933)に《鍵屋の辻》《乙女》など8点を出品。また、京都工芸美術展の第3回展(1932)に《琉球の女》《麗珠》《乙女》《琉球守礼門》が入選。第4回展(1933)にも入選したが、作品名は不明である。さらに1932年の第1回関西創作版画展(京都府植物園内大正記念館)にも《髪を梳く》《黒潮に泳ぐ》《熊谷次郎直実(文楽人形)》《南海の魚とパパイアの葉》《地引綱》を出品した。この他、1933年には「千島の学術・琉球芸術展」(2.7～9 京都・大丸)の開催に協力し、沖縄に関する自作の版画と収集した陶器を出品。また、1938年には「中川伊作蒐集南蛮陶器特別陳列」(4.25～5.15 恩賜京都博物館)が開かれ、沖縄で収集した南蛮古陶100余点を展示したが、その中には陶工に作らせた壺や鉢などに手を加えた自作の作品も多数含まれていたという。戦後も版画制作を続ける一方、1957年に神奈川県立近代美術館で開かれた「南蛮陶器展」(1.20～3.31)の開催に協力。1960年には「現代版画研究」を名目に渡米。サンフランシスコなど各地で個展を開催し、木版画を紹介。また、1964年にサンフランシスコの美術学校の客員教授となり、再渡米。同校の他、カリフォルニア大学などでも東洋画の講義を行ったという。1972年沖縄へ移住し、沖縄市知花に築寮。独自の焼き締め陶器「南蛮焼」(自身の焼き締め陶器を「南蛮」と称し、職人陶工の製品「荒焼」と区別した)の作陶を始め、以後、東京・名古屋・京都・大阪など全国各地で、南蛮焼と版画の個展を開催した。2000(平成12)年1月2日沖縄県で逝去。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)／島田康寛「中川伊作」『原色 浮世絵大百科事典』10(大修館書店1981)／島田康寛「中川伊作」『国画創作協会の全貌』(光村推古書院1996)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所2006)／桑原規子・春原史寛編「海外における日本版画展出品目録一覧」平成17～19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『日本近代版画の海外紹介とその国際評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—』(2008.5)／『壺屋焼 近代百年のあゆみ』展図録(那覇市立壺屋焼物博物館

2008)／『創作版画誌の系譜』(三木)

中川勝文(なかがわ・かつふみ)

日本エッチング研究所主宰西田武雄は児童生徒への教材として、エッチングを普及させようとして研究所に東京市内の小学校教師を招き、「エッチング研究座談会」を開催する。教師たちのエッチング技法へ理解を深めるために、実際に制作過程を実習。海外の作品やエッチング文献等を紹介し、意見交換を行った。第4回は1933年6月5日に開かれ、14名が参加。当時、芝区南桜小学校の教師であった中川もこの座談会に参加し、その時制作した作品が研究所機関誌『エッチング』第8号(1933.6)に掲載されている。西田は「中川先生の花は座談会席上のスケッチでしたが、当夜一番の佳作と推賞いたします。」と研究所通信に感想を記している。戦後は文京区立青柳小学校に所属し、『小学校の図工指導 下巻』(日本教育図書1949)に「金工指導」の項目を執筆している。【文献】『エッチング』8(加治)

中川紀元(なかがわ・きげん) 1892～1972

1892(明治25)年2月11日、長野県上伊那郡朝日村(現・辰野町)で有賀源衛の次男に生まれる。紀元節に生まれた次男から紀元次と命名。1916年中川ことと結婚し、中川家を継ぐ。1912年東京美術学校彫刻科に入学するが、三ヶ月で退学、その後は太平洋美術学校や本郷洋画研究所に通い、藤島武二からデッサン、石井柏亭から水彩画の指導を受ける。諏訪郡内の玉川小学校で図画の代用教員をしながら作画に励み、1915年第2回二科展に《自画像》《清水先生の顔》が初入選。以後例年出品。1919年から21年にかけて渡欧し、マチスのもとを訪問し、強い影響を受ける。20年に二科展に出品した《ロダンの家》等で犍牛賞、21年には《立てる女》等で二科賞を受賞し、一躍、第二次フォーヴィズムの移入者となる。1922年神原泰・矢部友衛・浅野猛府・古賀春江等と“アクション”を結成し、翌23年にアクション第1回展を開催。同時期、村山知義・柳瀬正夢・ブブノワ等がマヴォを結成している。アクションは1924年に第2回展を開催した後、解散する。1923年には二科会会員となるが、戦後の1947年旧二科会のメンバーと二紀会を結成し、その中心メンバーとして活躍する。作風は、マチス、フォーヴィズム、前衛的な作品から南画風へと多彩な展開を見せている。また白井喬二『富士に立つ影』(報知新聞社1925)、岸田国士『落葉日記』(白水社1937)、尾崎士郎「新人生劇場」(産経新聞連載1960)等の挿絵を始め、各種雑誌に多数の挿絵・カットを寄せている。一方、『マチスの人と作』『ピカソと立体派』(両書とも日本美術学院1923)、『西洋画通』(四六書院1930)、『世路のシミ』(天理時報社1941)、『画室のひとりごと』(生活社1946)、『隨筆みちくさの一束』(美術四季社1971)等多数の著作物や雑誌等での精力的な文筆活動を行い、鍋井克之・小出楯重・横井禮一等と雑誌『マロニエ』(マロニエ社1925)や木村莊八・林俊衛・今和次郎等と『アルト』(紀伊國屋書店1928)の創刊に関わっている。版画では1922年「中川紀元氏石版画会」が起こされ「神田神保町 清泉堂」毎月一枚1円50銭で頒布、第1回は《黒い帽子》と記載されている(「団体及び諸種の会」『美術月報』3-12 1922.9)。また多色木版には、1934年『慈容三態』(三枚組)や『南無観世音菩薩』が加藤版画研究所から発行されている。また中村岳稜・山口逢春・牧野虎雄ら「六潮会」のメンバーによる『六潮版

画集』(かすみ版 鈴木金平刷 全6図 1945)に1図と木版画集『風』(全6点 銀座・三味堂美術部 1936)に満州旅行をもとに描いた《黄塵》がある。1972(昭和47)年2月9日東京都田無で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和46年版(東京国立文化財研究所 1972)／『中川紀元 生誕百年』展図録(渋谷区立松濤美術館 1992)(森)

中川史郎(なかがわ・しろう)

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第23号(1934.2)「万国芸芸俗玩具号」に《象(シャム)》、第24号(1934.3)「続万国芸芸俗玩具号」に《胡桃割り人形(ドイツ)》を発表する。24号では史朗を使用。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

中川泰蔵(なかがわ・たいぞう) 1870～1964

1896(明治29)年、兵庫県に生まれる。1919年京都高等工芸学校図案科を卒業。同年名古屋製陶所に入社するが、1921年以降は京都蛇ヶ谷に工房を構えて作陶生活に入る。1934年には石黒宗磨と倉敷で二人展を開催するなど陶芸家として制作活動を行っている。国画会第5・6・11・12・18回(1930～1933)の工芸部門に出品。戦後は京都陶磁器共同作業所の画工として働き、1964(昭和39)年に逝去。版画制作については、中井平三郎が中心となって設立した京都エッチング協会(1938年1月からは毎月研究会も行われた)に所属し、1936年8月8・9日の関西小国民社に於いて開催された協会主催のエッチング講習会(幹事:中井平三郎 講師:西田武雄)に参加。28名の出席者には京都エッチング協会所属の独立美術系の須田国太郎や北脇昇らも参加している。ここでは一人2枚の作品を制作し、その時の中川の作品と思われる昆虫を描いた銅版画が西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第50号(1936.12)に掲載されている。翌年8月7・8日にも講習会(関西小国民社)が開催され、中川は前年参加した北脇らと共に出席している。【文献】『エッチング』47・50・54・58・60／『京都の美術工芸100年』展図録(京都市美術館 1967)／東京文化財研究所編『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／「陶芸家の逸話石黒宗磨 3」(インターネット検索)(加治)

中川八郎(なかがわ・はちろう) 1877～1922

1877(明治10)年12月2日愛媛県喜多郡天神村(現・内子町)に生まれる。両親と死に別れ、1886年大阪に住む叔父に養われる。1895年第4回内国勸業博覧会で日清戦争の油絵を見て洋画家を志し、松原三五郎の天彩画塾に入門。翌年、松原の紹介で小山正太郎の不同舎に入り、吉田博や大下藤次郎と知己になる。1908年明治美術会創立10周年記念展に《雪林帰牧》《肖像》2点(墨画)を出品。99年吉田博と共にアメリカに渡る。デトロイト美術館・ボストン美術館で2人展を開催し、その売り上げで欧州へ向かう。翌年、河合新蔵・満谷国四郎・鹿子木孟郎・丸山晩霞等とボストンで合流し、ボストン始めワシントンで6人展を開催し、成功を収める。吉田と中川は一行と別れ1901年アメリカから帰国する。翌年、太平洋画会の会務委員として参加し、第1回展に《松原》等、油彩・水彩11点を出品、以後例年出品するが、1903年10月から06年にかけて2回目に欧米旅行に出る。1907年第1回文展に《夏の光》他2点を出品し三等賞を受賞、以後帝展も含め例年出品する。1910年11月、中村不折・満谷・

小杉未醒・吉田等10人で小豆島に写生旅行し、翌11年2月、各自のスケッチ等を原色版・写真版・石版で収録した『十人写生旅行』を、同年3月には吉田・石川寅二・小杉・大下等7人で瀬戸内海を写生旅行し『瀬戸内海写生一週』を、興文社から出版する。同年12月、吉田・石川と九州・沖縄に写生旅行し、大阪朝日新聞に「九州・沖縄写生旅行」のスケッチを各自交替で連載する。人生の大半を写生旅行に過ごし、その最期も1922年11月、3回目の欧州旅行の途次、滞欧先で体調を壊し、パリから急遽帰国するが、翌23年8月1日神戸港入港と共に山手病院に入院、8月3日に逝去。版画には石川寅治・中沢弘光・安田稔と共作の木版画集『新領土みやげ』(全4点 金尾文淵堂 1917)に《漢江の春》がある。【文献】『中川八郎とその時代展』図録(愛媛県立美術館編 1998)／『石川寅治展』図録(高知県立美術館 2002)(森)

中川 博(なかがわ・ひろし)

朝井清が主宰する「呉版画倶楽部」(1936.5頃結成)の会員。参加時期は不明であるが、1939(昭和14)年6月第2回呉版画倶楽部展に出品。翌1940年の第9回日本版画協会展にも《海濱夕景》が入選した。出品時は呉に住む。【文献】『日本版画協会会報』31(1939.9)／「第九回日本版画協会展覧会目録」(1940)(三木)

中川雄太郎(なかがわ・ゆうたろう) 1910～1975

1910年(明治43)7月20日静岡県庵原郡西奈村瀬名(現・静岡市葵区瀬名)に生まれる。1929年静岡県立庵原中学校(現・清水東高校)を卒業する。在学中、長島豊氏に師事し油絵を学ぶ。卒業後に同級生や地元の青年達に声を掛け、竜南藝術研究会を主宰する。同年第1回芦美会展に木版画《竜南風景》を出品する。兼ねてより興味を持っていた版画の初出でもある。また小川龍彦、栗山茂、中村岳らが主宰する童土社の第2回創作版画展(1930)を見学し刺激を受け、童土社の同人となる。その刺激は版画研究により深く駆り立てることとなり、趣味の領域から版画家への道に第一歩を踏み出すこととなった。同年文芸誌『かけた壺』を主宰し編集するが、第14号(1931.11)の「展覧会記念号」から版画同人誌へと方向を変える。その結果、童土社の同人達に本誌への参加を促すこととなり、版画同人誌としての位置が鮮明となる。その一方、中川も童土社の版画同人誌『ゆうかり』への発表を第5・6〔合併〕号(1931.12)より開始し、第21号(1934.9)から第30号(1935.8)までは実質的な編集者となる。1934年に静岡県美術協会が創立され常任理事となる。同年9月より『静岡新報』に版画《新静岡風景》が翌年3月まで掲載する。1935年には『名古屋新聞』に「駿遠豆伝説物語」の挿絵を描くなど、地域活動に積極的に取り組む。その一方、版画家としての意識は中央へと向い、1932年には全国誌である『白と黒』(第22～50号)や『版芸術』に作品を発表する。1933年の第8回国画会展に《百姓家のせど》を初出品し入選する。また、展示期間中に平塚運一・恩地孝四郎・前川千帆氏らを訪問する。この訪問は以後の創作活動に大きな影響を与えることになる。国画会展では第23回展(1949)で会友に推挙され、第31回展(1957)で会友優作賞を受賞し、翌年の第32回展で会員に推挙される。日本版画協会展は、第3回展(1933)に《ソファの上》が初出品で入選し、第7回展(1938)で会員に推挙される。国画会展、日本版画協会展への出品は、断続的ではあるが1973年まで続く。また1957年

の第1回東京国際版画ビエンナーレ展に《山の伝説》を出品し入選した他、現代版画の海外展にも積極的に参加する。地元静岡での活動については、第1回静岡県版画協会展（1949）に出品し、会員に推挙された頃から活発化し、中川雄太郎版画展、近作版画展、小品展等の個展や、「カッパ」を冠した各種の展覧会を開催する。版画の普及活動の一環として、版画・美術講習会を実施するなどの他、静岡県全体の文化行政に関係を持ち、1962年に静岡県文化協会常任理事に就任する。1967年には静岡県文化奨励賞を受賞する。教育者として静岡県立清水女子商業学校、静岡城内高等学校図画教員、静岡市立商業学校講師、静岡英和女学院、静岡工業高等学校講師などを歴任する。1974年に「郷土の画人」48回を『静岡新聞』に執筆し、その翌1975（昭和50）年4月10日逝去。また1945年頃より、郷土の民俗・伝承に興味を持ち多くの成果を上げた郷土史家でもあった。著書には『版画手帳』（1949）、『村の伝説』（1965）、『静岡県版画史話』（1967）、『村の民俗』（1969）、『竜南俳句の流れ』（1970）他多数。【文献】中川雄太郎「野獣生育記」『エッチング』105（1941）／立花義彰「中川雄太郎の人と作品一寄贈作品を中心に」『静岡県立美術館紀要』4（静岡県立美術館 1986）／『静岡の創作版画』展図録（静岡県立美術館 1991）／『昭和美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』（河野）

中川義憲（なかがわ・よしのり）

1936年に中井平三郎が中心となって発足した京都エッチング協会の会員で、同年8月8・9日、関西小国民社に於いて西田武雄を講師に招いて開催された京都講習会に参加。当時、中川は京都市七條尋常高等小学校主席訓導で、同校図画主任蘆田泰淳とともに同年11月10・11日に同校を会場に、再び西田武雄を講師に招いて京都においては小中学校生を対象にした初めてのエッチング講習会を開催する。同講習会には京都市内の高等科1・2年と尋常科6年の抜擢児童10名及び同校教諭などが参加した。【文献】『エッチング』47・50（樋口）

長坂春雄（ながさか・はるお）1900～1973

1900（明治33）年〔1月29日か〕東京に生まれる。旧姓は笹川。1931年1月から7月の間に「長坂」姓となる。絵をだれから学んだのかは不明であるが、1917年の第5回光風会展に水彩画《しゃくなぎ》《緑春》が入選。同年か、東京美術学校製版科選科に入学。在学中、1918年の第6回光風会展に水彩画《冬の日》《若葉の頃》《百日草》、翌年の第1回帝展に油彩画《静物》が入選。また、日本水彩画会展にも出品していたようで、1919年の第5回展で会員になっている。1920年東京美術学校を卒業。石版画を能くし、同年の第2回日本創作版画協会展に《風景》2点を出品。その後も第3回展（1921）に《風景》5点、第4回展（1922）に《風景》2点、第5回展（1923）に《北海の岬》、第6回展（1924）に《山上湖》と出品を重ねた。また、1924年には石版画の個展（3.10～16 神田・文房堂）を開き、《横浜風景》《北海の海岸》《奈良風景》《雪の山》《大阪の郊外》《谷川》など24点を展示した。1927年〔or1928年5月頃〕渡仏。主に油彩画を学び、1929年の仏蘭西日本美術家協会パリ1回展（4.8～20 ルネサンス画廊）に出品。その後、同年の第10回帝展に油彩画《マドモアゼルF》が入選した。翌1930年帰国。同年の第17回光風会展に《クラマール風景》、第2回聖徳太子奉讃美術展に

《少年》、翌1931年の第12回帝展に《庭先》が入選したが、いずれも油彩画であった。版画の方は、帰国後に「洋風版画会」（1929.12 結成）に参加し、第1回展（1930）に出品。その後も第2回展（1931）に《婦人像》など3点、第3回展（1932）に《椿》などを出品した。また、1931年1月の「日本版画協会」の結成には、「洋風版画会」のメンバーとともに会員として参加。第1回展に石版画《花市（伊太利風景）》《雨の海》《鈴木信子女史像》、第2回展（1932）に《マドアゼルS》、第3回展（1933）に《婦人像》《朝鮮風景》《シェファア・フンド》、「日本現代版画とその源流」展（1934.2 パリ・装飾美術館）に《婦人像》を出品した。1934年から翌年にかけて再度仏。帰国後は二科展に油彩画を出品し、第22回展（1935）に《伊太利風景》、第23回展（1936）に《外出》、第24回展（1937）に《料理》が入選。またその間、1936年の第11回国際オリンピック大会芸術競技（ベルリン）に石版画《高跳》を出品した。その後、期間は不明であるが応召され、衛生上等兵として上海に従軍中の1938年には、上海軍報導部が計画した「上海戦線記念絵画」（各200号）を中村研一・小磯良平らと手分けして制作した。1939年からは新文展の無鑑査となり、同年の第3回展に石版画《斥候》、第4回展（1941）に《鐘樓の朝》〔目録には水彩とあるも『日本版画協会々報』35の「版画消息」では石版画とする〕、第6回展（1943）に水彩画《静かなる夕》、文部省戦時特別美術展（1944）に《ソ満国境守備》〔種別不明〕を出品。また、陸軍美術協会などが主催する第1回・第2回聖戦美術展（1939・1941）、陸軍美術展（1943・1945）、国民総力決戦美術展（1943）、第2回大東亜戦争美術展（1943）などにも出品した。戦後は、1946年の第1回行動展に出品し、会友に推挙されたが、1953年からは日展（第9回展）に転じ、1956年の第12回展からは出品委嘱になった。1956年からは光風会展（42回展）に出品し、翌年会員に推挙され、1970年の第56回展まで出品。また、1960年には棟方志功らが結成した版画集団「日版会」の創立に参加した。1973（昭和48）年東京都で逝去。【文献】『光風会史—80回の歩み—』（光風会 1994）／『第85回記念光風会目録集』（光風会 1999）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第三巻』（ぎょうせい 1997）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／桑原規子・春原史寛編「海外における日本版画展出品目録一覧」平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書『日本近代版画の海外紹介とその国際評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—』（2008.5）／『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録（徳島県立近代美術館他 1998）（三木）

仲郷三郎（なかさと・さぶろう）

神戸在住の実業家。西田武雄の『エッチング』誌に度々寄稿。第57号（1937.7）に「エッチング雑話」、第59号（1937.9）に「エッチング雑話（二）」、第62号（1937.12）に「戦争と美術」、第66号（1938.4）に「ノーマン・リンゼイ」、第108号（1942.1）に「豪洲の回想」、第110号（1942.3）に「大東亜戦争と絵画人」・「豪洲の回想（二）」、第111号（1942.4）に「豪洲の回想（三）」、第114号（1942.7）に「豪洲のエッチング」など。『エッチング』第57号の「研究所通信」によれば、「仲郷三郎氏は神戸文壇の雄、歌人でもあり評論家でもある。神戸の増田製粉所員〔役員〕。木版画に巧みである」と紹介されているが、作品は未見。

1943年に版画奉公会会員となる。「藤田栄三郎」名で神戸新聞に連載の『為永春水』（未見）や『四季・仲郷三郎自選歌集』（酔醒樓書屋 1957）、『味・そぞろある記』（のじぎく文庫 1960）などの著作、また1951年神戸市歌の制定審査委員にも名を連ねる。【文献】『エッチング』57・59・62・66・108・110・111・114・126（樋口）

中沢弘光（なかざわ・ひろみつ）1874～1964

1874（明治7）年8月4日東京芝源助町（現・港区新橋）に生まれる。画家を志し13歳で曾山（大野）幸彦の画塾に入門。1893年明治美術会第5回展に《上巳》を出品。1896年東京美術学校西洋画科に進み、黒田清輝に学ぶ。門下の俊英として1897年の第2回展から白馬会展に出品（1910年の第13回展まで連続出品）。1907年の東京勸業博覧会では《嵐のあと》が一等賞、同年の第1回文展では《夏》が三等賞を受賞。以後文展で受賞を続け（第2回展で《雄鹿半島の一角》が三等賞、第3回展で《おもいで》が二等賞）、1910年より文展の審査委員となり、翌年結成された国民美術協会では規則起草委員・西洋画部役員となるなど、洋画界の中枢で活躍した。1912年に光風会を、1913年に日本水彩画会を創立。1922（大正11）年渡欧、1924年白日電会創立。1944（昭和19）年帝室技芸員。戦後も日展などを舞台に温雅な風景画や人物画の発表を続けた。1957年文化功労者に選出、1964（昭和39）年9月8日東京都文京区にて逝去。

油彩画家としての活動のかたわら、明治後期から大正期にかけて雑誌の表紙や口絵、書籍の装幀や挿絵、絵葉書など、夥しい版の仕事を残している。それらはヨーロッパのアール・ヌーヴォースタイル（『ユーゲント』や『ストゥディオ』に学んだことが判明している）に伝統的な図柄を巧みに融合させた、完成度の高いものが多い。まずは和田英作の仲介により1900年頃から手掛けた毎日新聞などの新聞コマ絵があり、雑誌では与謝野鉄幹との親交から1903年頃始まった『明星』の挿画、1905～08年の白馬会機関誌『光風』挿画、1910年の『白刀』1号付録版画《温泉スケッチ》、1912～14年の『新小説』表紙などがある。書籍装幀では1904年の『藻塩草』（細川花紅著・流水墅書院）や1905年の『恋衣』（山川登美子ほか著・本郷書院）、見返しと挿画に腕をふるった1906～13年の『日本名勝写生旅行』全5巻（中沢ほか著・中西屋書店）、1911年の『不如帰画譜』（徳富蘆花原著・佐久良書房）、1916年の『舞姿：祇園画集』（長田幹彦＋吉井勇著・阿蘭陀書房）などがよく知られるが、とりわけ金尾文淵堂の刊行物に精妙で贅沢な木版の仕事が多い（同社の装幀を最も多く手がけたのは中沢である）。1911～12年の『畿内見物』3巻、1912～13年の与謝野晶子『新訳源氏物語』3巻4冊、1914年の渋川玄耳『新訳平家物語』2巻、1914～15年の与謝野晶子『新訳栄華物語』3巻が名高く、なかでも親交があり、自らも和歌を嗜んだ中沢が『みだれ髪』に感激して以来敬愛してやまなかった与謝野晶子との仕事は装幀史に残る優品といえる。そのほか木版画と呼べるものに1905年の『五十三次すけっち』（大野書店）、やはり金尾文淵堂から出版した1907年の『富士十二景』・1917年の『新領土土産』（共著・中沢は《慶州邑内の一》で参加）・1922年の『日本大観』・1925年の『西国三十三所巡礼画卷』、あるいは1922年の『大近松全集』6巻付録『松風村雨束帯鑑』の松風がある。さらに一枚摺の木版画には、1933年の『西村熊吉版 現代作家画東京百景』の第一図『早春の日本橋』があり、未確認のものとして1929年の『主

情派現代風俗版画集』のうち《舞妓夕涼みの図》、1935年頃の加藤版『中澤弘光氏版画集』12点がある（《三井寺の弁慶力餅》《猿沢池畔の柳》《祇園の宿》の3図のみ確認）。展覧会としては、1922年2月頃三越で開催された「中澤弘光日本名勝展」に油彩のほか版画80点を出品した記録があり、1928年の第15回光風会にも「晶子女史歌集挿絵」の出品記録がある。中沢は彫師伊上凡骨や摺師西村熊吉といった野心的な職人たちと組むことが多く、また『明星』時代から自身も木版を学び、版の味を活かしうる、面と線とを巧みに構成した下絵を提供したことから、版の絵としての魅力に富む作品をあまた残した。こうした版の仕事については孫で版画家の三井（弦屋）光溪氏が『中澤弘光研究 本からの検証（孫で版画家の弦屋光溪蔵品による）』（三井光溪 2006）で詳しく紹介している。【文献】中沢弘光「明治から大正へかけて 私の装釘」『書物展望』5巻4号（1935.4）／石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』（新宿書房 2005）／『中澤弘光研究 本からの検証（孫で版画家の弦屋光溪蔵品による）』（三井光溪 2006）／『生誕140年 中澤弘光展－知られざる画家の軌跡』（三重県立美術館＋そごう美術館 2014）（西山）

中澤松雄（なかざわ・まつお）

長野県須坂では、日本各地の版画同人誌に作品を発表していた小林朝治が中心となって1933年に開催した「版画及び図画講習会」（須坂小学校 講師：平塚運一）を契機に、版画誌『櫟』（1933～1937）が創刊された。その第12輯（1937）に賀状を発表。12輯の後記には「日本画作家当町在住の中澤会員が鑑賞から勇躍試刀された事」とあり、日本画を制作していたことがわかるが、詳細は不明。2004年には『生涯学習』（日本図書刊行会）を上梓。これはNHK学園通信講座「わたしの人間大学」の課題によるレポートを纏め出版したもの。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌『櫟』『臥竜山風景版画集』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

中嶋亀孝（なかじま・きこう）1907-1980

1907（明治40）年7月1日、長野県下伊那郡阿智村清内路に桜井藤内の三男として生まれる。1927年に長野師範学校本科第一部を卒業。上伊那郡高遠尋常小学校をはじめとして、県内の小学校に教員として勤務。1936年、中嶋操との結婚を期に「中嶋」姓を名乗る。教職に従事する傍ら、1929年の伊那の彫塑講習会（講師：石井鶴三）に出席し、彫塑作品の制作に励むようになる。翌年にも講習会に参加。以後、石井鶴三を終生の師として彫塑制作を生涯続ける。その講習については「彫塑講習会と私」と題し、『石井鶴三先生 信州上田と』（小県上田教育会 1934）に思い出を執筆している。1946年には教頭、1950年には北安曇郡七貫小学校の校長となり、1963年の西穂高小学校校長を最後に36年間の教職を退く。退職後は豊科町の自宅にアトリエを建て制作に励み、彫塑仲間と展覧会を開催している。糖尿病を患い1980（昭和55）年11月23日73歳にて逝去。1984年緑山美術館主催による中嶋亀孝・江崎実の遺作展が開かれ、1992年には豊科町郷土博物館において開催された「昭和を生きた郷土の彫刻家たち」展（9.4～10.28）にも作品が展示された。版画制作では、長野県北安曇郡の小学校教師たちが教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、発行した版画誌『黄樹』（全

2号)の創刊号(1937.3)に《帰路》、第2号(1938.5)に《西山》を発表している。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)／『昭和を生きた郷土の彫刻家たち』展図録(豊科町教育委員会 1994)／『創作版画誌の系譜』(加治)

中島 昂(なかじま・たかし)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)在学中に、同校生徒が発行した版画誌『刀』(1928-32)に参加。その第8輯(1930)に《帆船》、第9輯(1930)に《風景》、第10輯(1931)に《ラグビー》、第11輯(1931)に《無題》、第12輯(1931)に《風景》、第13輯(1932)に表紙絵と《風景》を発表する。1933年に同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

中嶋 仲(なかじま・ちゅう)

明治期の石版印刷業界誌『虹』第1巻1号(1908.2)に《鶯》《虹の午》(関藤吉と共作)、第1巻6号(1908.7)に《夏の野》、第2巻2号(1909.2)に《高嶺の鳥》の石版画を発表。現在、『虹』は第1巻6号～第3巻6号(1910.6)のうち17号分が確認されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

中島友次郎(なかじま・ともじろう)

1936年7月27日から8月1日の6日間に東京の日本美術学校で開かれた夏期版画講習会(講師:平塚運一・西田武雄ら 木版画受講生10名、エッチング受講生6名)に参加。中島はエッチングを受講し、西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第46号(1936.8)に、この講習会で制作した東京日本橋の風景を描いた銅版画が掲載されている。『エッチング』第107号(1941.12)掲載の「研究所製プレス機の所有者」欄に中島の名が載っており、この時期にプレス機を購入したようだが、その後の作品は確認できず。鍍金師。1936年当時、東京市下谷区中清水町に在住。【文献】『エッチング』46・107(加治)

中島範子(なかじま・のりこ)

東京の文化学院では1933年秋に専修科のエッチング講習会を行った。女学部でも翌1934年3月7日、教師赤城泰舒の指導のもと、日本エッチング研究所西田武雄を講師に迎えて、3年生教室においてエッチングの実習(受講者10名)が行われた。女学部3年在学中の中島も受講。教室の実習風景と人形を描いた銅版画が研究所機関誌『エッチング』第17号(1934.3)に掲載されている。【文献】『エッチング』17(加治)

中島 博(なかじま・ひろし)

長野県の生まれか。号は「天樹」。1928年東京美術学校彫刻科木彫部に入学。校友会版画部に属し、1930年11月の展覧会(28～29 東京美術学校大講堂入口)に《夜の街燈》を出品。1933年東京美術学校を卒業。その後の活動は不明であるが、1972年頃は長野市三輪田町に住む。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『[東京美術学校]校友会月報』26-8・27-3(東京美術学校校友会 1928.3・7)／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科

昭和47年版』(1972.12)(三木)

中島文夫(なかじま・ふみお)

1935年大分県師範学校主催の創作版画講習会(1935.8.1～5 講師:平塚運一・畦地梅太郎)に参加。その時制作した木版画《花》は武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第8号(1935.10)講習会記念号に掲載されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

長島 豊(ながしま・ゆたか)

1924年、東京美術学校西洋画科を卒業する。1926年から静岡県立庵原中学校(現・清水東高校)の図画教師となり、在校生の中川雄太郎に油絵の手ほどきをする(「中川雄太郎」の項参照)。1938年4月に掛川高女に転任し、1941年まで務め、1942年には島田高女、1945～49年には静岡工業で教鞭をとる。当時、静岡市水落町1-30に在住。静岡の小川龍彦、仲村岳、栗山茂らは「童土社」を立ち上げ、版画同人誌『ゆうかり』(1931～1935)を創刊。教え子中川雄太郎は第5・6合併号(1931.12)から版画作品を発表し、第21号(1934.9)からは編集発行にも携わる。第26号(1935.3)の「ゆうかり同人録」には長島の名前も掲載されているが、同誌上での版画作品は発表されていない。長島の版画作品としては「昭和8年12月県立庵原中学校同窓会誌第1号扉絵に、長島豊氏の裸婦が掲載され、氏としては唯一無二の作品かもしれない」と中川雄太郎が書いているが、未見。【文献】『ゆうかり』26／中川雄太郎『静岡県版画史話』(童芸工房 1967)／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧の研究報告書 第1部 直轄学校、及び北海道～三重県まで』(金子一夫 2016)(加治)

永瀬義郎(ながせ・よしろう) 1891～1971

1891(明治24)年1月5日茨城県西茨城郡北那珂村(現・桜川市)に生まれる。名は義朗とも書き、「ぎろう」と読ませることもある。1908年県立土浦中学校を卒業、上京して1909年頃白馬会原町洋画研究所に学ぶ。1910年白馬会第13回展に油彩画《河辺》《小屋》入選。1911年東京美術学校彫刻科塑造部予備科に進むが数日で退学。『白樺』を愛読し、ムンクに魅せられて木版画を始める。1913年5月文芸雑誌『聖盃』(9月に『假面』と改題)の同人となり、長谷川潔とともに表紙や扉、カット、裏絵を自刻木版で手がけ、この頃から生涯のテーマとなる官能的な女性像を多く描く。同年11月『『假面』主催洋画展覧会』を開催、自身の出品は油彩画21点だったが、長谷川と小穴隆一、広島新太郎は木版画や銅版画を出品している。1914年10月の第1回二科展に木版画5点を出品、リーチのエッチングとともに公募展における最初の創作版画出品となる。このうち《母の愛》は紺紙金摺により、早くから既成概念にとらわれない自由な制作を試みていたことが知れる。また同じ年に鍋井克之や宇野浩二らと美術劇場を結成、銀座に工芸品の露店アカシヤを開くなど、表現手段も多彩かつ奔放であった。二科展へは1915年の第2回展にも木版画4点を出品している。1916年1月頃頒布会「長谷川潔・永瀬義郎版画会」発足、同年長谷川・広島とともに日本版画倶楽部を結成、外遊中の山本鼎に先駆けるべく11月に第1回展を開催、初の創作版画展を実現した。1918年6月の日本創作版画協会創立に際しては会員として参加、以後6回展をのぞき9回展まで出品。多くは木版画だが、1～3回展ではモノタイプも披露して

いる。1921年版画社の発行する創作版画誌『版画』の顧問となり、翌年『詩と版画』にも参加。1922年2月には神戸における初の版画展「弦月会創作版画展覧会」に出品、戸張孤雁とともに講演会の講師も務めている。同年11月『版画をつくる人へ』刊行（日本美術学院、1925年中央美術社が改版）、版画の常識や伝統はもちろん、自刻自摺の原則にすら縛られない自由な制作を推奨して広く読まれ、谷中安規を初めとする多くの若者を版に導いた。またこの年の末からは山本鼎の農民美術研究所にも講師として参加している。1927（昭和2）年、創作版画が初めて受理された帝展第8回展に《髪》が入選、翌年の第9回展でも《花》が入選。同年（か）日本版画社が出版した『日本現代創作版画大集』に参加。同じ頃『アルス大美術講座』に寄稿、「合羽版その他」を担当する。1929年版画《ある日の上山草人》《トルコ帽をかぶれる男》および油彩画《花》を第7回春陽会展に出品、春陽会賞を受賞。同年5月版画研究のため渡仏。旅に取材して版画連作《東洋の旅》を残す。滞仏中の1931年に日本版画協会が結成されると同年9月の第1回展より会員として出品、以後3、7～9回展に出品がある（7回展は捺染版、8回展は布目摺込、9回展は「特別陳列 版畫史的展観第三 版畫興隆期作品」として1915年の木版画5点を展示）。1936年4月帰国。5月に版画5点を含む50点からなる「滞欧作品個人展」開催。1938年第2回新文展に無鑑査で《ピクニック》出品（拓摺か）。1939年4月、恩地孝四郎とともに日本版画協会の代表に選ばれ、陸軍嘱託として中国大陸視察に赴き、北支へ渡る。同年10月の第3回新文展に無鑑査出品するも、版画ではなく油彩画をだしたため拒否され、以後文展から遠ざかる。戦後は新樹会展や日展、日本版画協会展、光風会展などを舞台に活躍。1957年の第1回国際版画ビエンナーレでは国内委員として《幻想》と《空飛ぶ童子》を出品。1960年日版会の結成に参加。1969年水戸市で「永瀬義郎自選版画展」開催、1970年東京高島屋で「画業60年記念永瀬義郎自選展」開催、1973年水戸市で「日本近代版画60年の歩み・永瀬義郎自選版画展」を開催するなど版業を回顧する大規模展が相次いだが、晩年においても表現意欲は衰えず、技法の開拓も続き、80歳を超えた1973年に合成樹脂を利用した新技法「Nagase Prints '73」を開発。同じ年、『メソドス』誌に「永瀬義郎生涯を語る - “放浪記族”」の連載を口述筆記により開始、波乱に富んだ来し方をユーモラスに語った（1977年に『放浪貴族』として出版）。1978（昭和53）年3月8日東京都港区にて逝去。【文献】永瀬義郎「自述伝」『エッチング』90（1940.5）／永瀬義郎『放浪記族』（国際PHP研究所1977）／『NAGASE 人と芸術』（ネオアカシヤ 1978）／『日本美術年鑑（昭和54年版）』（東京文化財研究所1981）／『日本近代版画の歩み展 永瀬義郎と大正・昭和戦前期の作家たち』展図録（練馬区立美術館ほか 1993）（西山）

中園 泰（なかその・やすし）

大分県中津市で発行された版画同人誌は『空巢』（1931～1932）と『鳩笛』（1934）である。『空巢』は4号で休刊し、両誌に関わった島美智雄と武田由平が中心となって、版画と文芸の同人誌『鳩笛』を創刊する。『鳩笛』は都会的な洒落た表紙の版画誌であったが、2輯で休刊。中園はその第2輯（1934.4）に《早春》と《新芽》を発表。武藤完一は「新進の中園泰氏作は2点、黒版だけの出品であるが、『新芽』の方が良い」と評している。その後の制作は

不明。【文献】武藤完一「『鳩笛』第二輯を見る」『大分新聞』（1934.5.18）／『創作版画誌の系譜』（加治）